騰落予想

大正六年の株式売買

国立国会図書館

339
907

始

エト7M-18
339-907

騰落豫想

大正六年の株式賣買

白眼老叟著

大正
6. 4. 6
内交

冕言

大正五年の株式界が、十二月十三日獨帝の媾和提議の電報によりて土崩瓦解の慘狀を呈し、市場をして亦收拾すべからざる悲況に沈淪せしめたるは、投機界の變幻極りなきの常態にて敢て怪しむに足らずとは云へ、餘りの狼狽にて、今日より見るときは世人の輕薄と、市場の無氣力とに驚嘆せざるを得ざるなり

熟々當時の情勢を追懐するに、初め株式の市價を煽揚して沸騰底止するところなきの勢力を馴致せしめたるは、一時金融大溪慢の結果、銀行業者が株式に對して濫貸を試みたるの結果にして、一朝政府當局者が資金調節策を云爲し銀行業者が資金を回收するや、端なくも株式界に變化を生じ、十一月に入りて少しく挫折の兆を現はし、折から獨帝の媾和提唱が意外の大動搖を來たせる次第にて、要するに大正五年後期の人氣が、戰局のつゞく限り株價に下落なしとて只管買の一方に偏し、濫りに買煽りたる反動に外ならざるなり。然れども年末の大崩落は媾和相場を充分に現はし、買方の不健全分子を一掃して、相場の居所を充分精錬したるなれば、六年前季の相場は假令ひ商勢不活潑にして漸次弱味を帶ふる傾向ありとも、到底暴落を見るが如きことはあらざるべく、後季に入りては正貨は益々充實し、年末ともならば無慮拾億を算するに至るべく、或は十二三億に上ぼるべき望みあり、十億の正貨を有せし國は、戰前にありては米、佛、露の三ヶ國に過ざざ

りしと云へば、我財界の偉大なる膨脹には何人も驚かざるを得ざるべし、隨つて本年の株式界は、層一層其舞臺を擴ぐること勿論なれば、巧みに其間に乘じ變轉に處するに於ては大なる成功を贏ち得べく、要は大局を達觀して確乎たる信念に據るにあり、徒らに好機を逸して逡巡阻止するが如きは予の執らざるところなり

大正六年二月鎌倉の山莊に於て

白眼老叟述

騰落豫想 大正六年の株式賣買

目次

十年目の大相場……一頁
本年の經濟界……三
過去一年間の概況……一〇
大正六年の株式界……一七
金融界よりの觀察……一八
對外貿易の趨勢……二七
戰爭の繼續如何……三〇
統計上よりの觀察……三一
大正六年の政界……三五
上半期の豫想……三九

下半期の豫想……四一
最近に於ける高値と安値……四五

附　錄（會社一覽）

南滿洲鐵道株式會社……一
東武鐵道株式會社……二
成田鐵道株式會社……三
京濱電氣鐵道株式會社……四
横濱電氣鐵道株式會社……五
日本郵船株式會社……六
東洋汽船株式會社……七
大阪商船株式會社……八
横濱船渠株式會社……九
新潟鐵工所……一〇
横濱正金銀行……一一
日本興業銀行……一二

北海道炭礦汽船株式會社……一二
▲炭價の將來に就て（當業者の意見）
九州炭礦汽船株式會社……一四
入山採炭株式會社……一五
東京建物株式會社……一六
石狩石炭株式會社……一六
東京瓦斯株式會社……一七
東京電燈株式會社……一八
日本電燈株式會社……一九
利根發電株式會社……二〇
鬼怒川水力電氣株式會社……二一
猪苗代水力電氣株式會社……二一
桂川電力株式會社……二二
横濱倉庫株式會社……二三
王子製紙株式會社……二四
▲製紙業の將來（藤原銀治郎氏意見）

東京板紙株式會社……二六
富士製紙株式會社……二七
東洋紡績株式會社……二七
尼ヶ崎紡績株式會社……二八
富士瓦斯紡績株式會社……二九
鐘淵紡績株式會社……三〇
▲紡績業の將來（武藤山治氏意見）
日清紡績株式會社……三一
東京キヤリコ製織株式會社……三二
東京製絨株式會社……三三
東洋毛織株式會社……三三
東京毛織株式會社……三四
▲毛織業の將來（藤田謙一氏意見）
東京モスリン紡織株式會社……三五
東洋モスリン株式會社……三六
上毛モスリン株式會社……三七

日本鋼管株式會社……三八
大日本麥酒株式會社……三九
麒麟麥酒株式會社……四〇
東京製鋼株式會社……四〇
日本皮革株式會社……四一
帝國製麻株式會社……四二
日本製麻株式會社……四二
▲製麻業の將來（宮內二朔氏意見）
日本活動寫眞株式會社……四五
東京瓦斯電氣工業株式會社……四五
東洋捕鯨株式會社……四六
大日本製糖株式會社……四七
▲製糖業の將來（農商務當局者意見）
鹽水港製糖拓殖株式會社……四八
臺灣製糖株式會社……四九
東洋製糖株式會社……五〇

新高製糖株式會社……五〇
帝國製糖株式會社……五一
明治製糖株式會社……五二
沖臺拓殖製糖株式會社……五三
臺南製糖株式會社……五四
日本製粉株式會社……五五
日清製粉株式會社……五五
電氣化學工業株式會社……五六
日本ペイント製造株式會社……五七
品川白煉瓦株式會社……五八
日本セメント株式會社……五八
淺野セメント株式會社……五九
愛知セメント株式會社……六〇
大日本人造肥料株式會社……六〇
日本窒素肥料株式會社……六一
日本化學工業株式會社……六一

久原鑛業株式會社……六二
寶田石油株式會社……六三
日本石油株式會社……六四
横濱取引所……六四
東京米穀商品取引所……六五
大阪株式取引所……六六
東京株式取引所……六七
以上

騰落豫想

大正六年の株式賣買

白眼老叟述

大正五年の株式界は、恰も日露戰役後に於て大熱狂相場を演出したる時より十年目に當り、吾等が信ずる處の十年目毎の大相場に遭遇したることゝて、株式界に多少の趣味を有するものは孰れも多大の興味と注意とを以て環視しつゝありしが果して一陽來福と共に買氣興奮し來りて漸次に騰貴力を加へ、毎月の受渡高に於ても又た日々の出來高に於ても總べて新記錄を作り、加ふるに毎月の出超は驚くべき巨額に上ぼり、在外正貨は軍需品の賣行きと相俟つて激增し、內地の金融は愈々緩慢の狀を呈し財界の人心も漸次安心を强よめて市場は活氣橫溢し、下半季に至りては毎月大上鞘を買ふに至れり。就中關西地方は船成金、藥品成金、銅成

金、紡績成金等多き爲め、常に東京の上鞘を買ひて其勢形常に關東側を壓せり顧みれば歐洲戰亂勃發以來、既に二星霜を閲して未だ平和の曙光を認むる能はず、其何れの日に終熄すべきか殆んど逆睹し難き狀勢にありて、我が財界は容易に悲觀を容るさゞるものあり、今數理的に少しく細說を試みんか、我國一月以來の外國貿易は豫想以上の順調を呈し、旬々累加する出超額は年末に於て實に三億數千萬圓に達し、內外に於ける正貨の累積高又た既に七億を超ゆ、斯の如きは我國開闢以來未曾有の事にして、隨つて預金の激增又驚くべきものあり、大正四年九月末に於ける全國銀行の預金高十二億三千萬圓なりしもの、五年の九月には十七億六千萬圓に增加し、實に一ヶ年にして五億三千萬圓激增せり、されば金融が大緩慢を持續して戰亂の終熄せざる限り、海運業及び軍需品の收益いよ〳〵更らに增加すると明白の事由たれば、戰時關係株と紡績炭礦瓦斯電氣の如き平和株とに論なく、一般の買氣を刺激促進して諸株の暴騰を來たしたるは蓋し當然の成行にして、大正五年十一月の高値は東株四百七十九圓、同新株四百六十四圓、郵船四百八圓、鐘紡二百九十圓にして之れを戰前の相場に比すれば五六倍、年初の相場に比するも又二倍三倍の高値となりたり、隨つて從來の持合相場に慣れたる市人は何れも此の相場を以て行き過ぎなりとなし、近く反動の襲來を思ひ居る有樣なれども、空前の大戰亂を背景として稀有の好況を呈せることなれば、果して那邊に於て停まるべきや豫じめ想像し能はざるなり。而して一朝平和の聲を聽くことありとするも、愈々戰爭終局して全く各々其兵を收むるまでには、少くも半年以上一ヶ年余も要すべく、其後に至りても戰後若干の期限は尙ほ戰時同樣の經濟狀態を繼續すべければ、十年前の日露戰後と違ひて若干の期間は恐らく好調を失はざるべし、一月三日東京朝日新聞の所論『本年の經濟界』は最も吾等の意を得たるを以て左に摘錄せん。

大正六年の經濟界は如何。前年の如く果して好況を持續すべきや、將た早くも

反動の時機に入りて萎靡不振を極むべきや。此判斷は畢竟歐洲戰爭が今後も尙繼續すべきや否やに大關係を有すること言ふまでもなし。されど假に本年中に於て熙々たる平和の曙光が、漠々たる歐洲の戰雲中より仄見ゆることありとするも、眞に干戈の戢み、全然平和の狀態が恢復するまでには餘程の時日を要すべし。現に獨墺側よりせる平和の提議が到底物にならざるは勿論なりと雖も、假に彼等が愈終局の戰敗を自認し、無條件にて降を乞ふに至るとするも、如何にして將來の平和を保障せんかに就て、聯合國間の意見は容易に一致せざるべく、眞に平和の恢復を見るまでには相當の期間を要すべく、少くとも數箇月の時日を要すべし、其間は依然、戰時狀態を繼續するものと見ざる可からず。果して然らば我經濟界も亦當分今日の好況を繼續せざる可からざる道理なり。否假に歐洲戰爭が今日直に終熄するものと見做すも、尙且現今の如く兌換劵の發行高が平日に於ても五億圓內外に達し、年末には六億圓にも達する樣にては一般の經濟界が當分好況を呈すべきや疑ひを容れず。若し夫れ獨墺側の平和提議が聯合國によりて彈ね附けられたる後、戰爭が更に新規撒直しの姿を呈するに於ては、我經濟は爲に非常なる發展を爲すものと見ざる可らず。未だ精確に其成績を知悉する能はずと雖も、昨年中の貿易は殖民地の夫れをも加算する時は殆ど二十億圓の巨額に達し、三億八千餘萬圓の輸入超過となる。輸出入合計の二十億圓に達したるは驚くべき大進步なるが、其中の輸入超過が三億八千萬圓に達したるは更に一層驚くべき好成績たらざるを得ず。歐洲戰爭前までは、我國の貿易が每年輸入超過のみ打續き、隨つて我在外正貨は補充しても補充しても直ちに減却し、如何にして之を維持すべきやが朝野の大問題たりしは今之を繰返さゞるも、久々にて貿易の逆勢が一轉し、一億七千萬圓の輸出超過を示すに至りたりとて、世人が驚駭の目を睜りたるは實に僅かに一年前なりき。而して其後大隈侯が大正五年には二億五千萬圓、或は三億圓の輸出超過を示すこと

あるべしと演說したる時、世人は例の大言侯の無鐵砲に過ぎずとして殆ど取合はざりしなり。然るに昨年の輸出超過は大言侯の放言よりも更に多額に上り、二億五千萬圓は愚か三億八千萬圓といふ驚くべき巨額に達したるなり。若し之に貿易表に現れざる軍需品の輸出とか、船舶の運賃とかチャーター料とかを計算する時は、昨年中に於ける我國の正貨受取り勘定が五億圓以上に達すべきこと嘗て吾人の一論せし所の如し。尤も我國は別に外債の利拂として若干の正貨を外國に支拂はざるを得ずと雖も、其額は一兩年來大に減却せり。戰爭前迄は、其額は約六千五百萬圓と概算せられたれども、其後政府は續々短期並に長期の外國債を償還したるのみならず、英國の證劵を二回と露國の債劵を二回までも引受けたり。隨つて啻に我國が外債の利子として毎年支拂ふべき金額が一兩年來大に減じたるのみならず、我國は却て少なからざる正貨を利子として外國より受取るに至る。故に是等の金額を差引く時は今後利拂として我國の支拂を要する額は餘程減少し、多分四千萬圓内外を出でざるべし。更に此上米國移民の送金、我國に於ける產金額等をも計算する時は、外債利拂は多分是等の正貨にて差引相殺するを得べしと思はる。果して然らば、前記の昨年中に於て我國の受取るべき五億圓は、全部其儘我權利に屬し、殆ど何物をも差引くを要せざるなり。既に一昨年の正貨受取高が二億圓以上三億圓近くにも達したる上、我國は昨年中に於て更に五億圓の正貨を請取れり。若し戰爭が今後も尙繼續するものとして、假に今年も更に五億圓内外の正貨を請取るものとせば、爲めに我經濟界が驚く可き盛況を呈すべきは想像に難からず。かくて本年の經濟界は、若し吾人の想像する如く、戰爭が尙繼續すれば無論のこと、假に途中にて終熄することありとするも、吾人は決して其前途を悲觀する能はざるなり。

大勢既に可なり去らば各會社の實資と成績は如何と云ふに、大多數の會社は前季非常の利益を得て何れも特別の增配當を爲し、尙ほ別途積立金若しくは配當

平均準備積立金を爲し、更らに後季繰越金を豐富にして殊に大阪商船會社の決算と增資報告とを見ば如何に其の利益の莫大なるかに一驚を喫し、其の分配方の餘裕あると前途の好望なるとに人意を强ふするなるべし、即ち配當は前季の一割八分より一躍一割二分增の三割なるに稍々突飛の感を起さしむるものあるに諸積立金に三百八十萬圓、船價特別償却に二百五十萬圓、事業擴張資金と配當平均準備に各百萬圓を控除し、而かも前季繰越の八十萬圓に對し今季百二十萬圓を繰越しつゝあるなどは如何にも驚嘆すべき好成績にあらずや、加之今後發展活動の確信よりして資本金を倍額以上の五千萬圓に增加して十分株主を安心滿足せしむるの成算ありと云ふに至つては更に其好望に驚かざるを得ず、宜なる哉年末納會に於ける同株は俄然四五十圓方の大暴騰を演じたるや。商船既に然り郵船會社今後の成績と發展活動とは果して如何、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん、商船の三割配當に對し郵船今季の配當は如何眞逆二割八分に甘ずることなかるべく商船の百廿萬圓繰越に對し千九百萬圓の繰越は果して如何に處分せらるべきか、將又た商船の資本五千萬圓にして果して成算ありとせば郵船は四千四百萬圓にて滿足せらるべきか如何、必らずや戰後の大發展を策せざるを得ざるべし、商船株の二百四十五圓は年に約六分一厘の利廻りに當り、年六分一厘は日步一錢六七厘に當れり、今後の金利と對照し增資附の相場としては頗る割安にあらずや、更に之と比較して郵船株の三百圓前後は云ふ迄もなく實に好箇の買物にあらずやと思惟せらる、是故に本年の株式は矢張り郵船株の增配增資問題を動機とするか、或は實質豐富にして今より利益金の處分に苦心しつゝある砂糖株の決算發表を導火線として又々漸進的活躍を爲すにあらざるか、いづれにしても株式の大勢は斷じて悲觀すべきにあらずと思はる云々。

以上の所論に考ふるも今後の株式は絶體に悲觀を容るさゞるべきも、此儘買方針に出づべき哉と云へばこは大に考ふべきものあらん、今其豫想を述ぶるに當り先

づ過去一年間の概況を掲げて參考に資せん

〔大正五年一月〕大納會の不振は一時春安見越しの人氣に傾きたるにも拘はらず一陽來復と共に買氣の新たに加はり來りて東株、汽船株、石油株を始め諸株一般に好調を呈し新甫も好轉を付けたり、斯くて主力株中新高値に突進したるもの尠なからざりしが、中旬に入り利喰と實株の壓迫を受けて伸び惱みの商狀を呈し、後ち南支那の動亂を氣構へて氣迷を生じ、場面著るしく閑散を來す、只だ此間に於て南滿鐵道株と製紙株のみは特殊の材料を得て活躍したり、然るに下旬に入ると共に諸株は船株を先驅として一齊に昂騰し、隨つて賣買高の如きも俄かに增加するに至り、遂に東株は三百二十五圓、同新三百四圓の新高値を付す、而して中頃一寸下押しを呈せるも受渡結了後の納會市場は人氣又々興奮して非常の活況を呈したり、試みに納會の引値を發會の寄付値段に比較し見ると、東株三十一圓、王子製紙四十二圓、富士製紙二十七圓、日本化學二十圓、日本石油十六圓、富士紡十五圓、鐘紡十圓方の騰貴にして、低落せるものは甚だ少數なり。

〔二月〕納會の好調を受けたるにも拘はらず還元問題に對し政府と貴族院の關係切迫すと傳ふるあり、又た某仲買人の小切手不渡事件等ありたる爲め、發會市場は不活潑なる商狀を呈したり、然れども財界の事情には何等の異狀を認めざるのみならず、生糸市場の如きは益々好況を呈しつゝあるより不渡事件の解決、政府對貴族院の妥協有望既に買氣を促進して、東株三百三十圓、同新三百十二圓の新高値を付す、

然るに十日前後より氣迷を萌しつゝありたる場面は、十四五日頃より諸株一齊に低落歩調を取り、遂に十七日に至つて瓦落相場を演出せり、之が爲め追證據金徵收額八百八十餘萬圓の多額に達したれば、整十八日は一般立會を停止して追證據金の納入を爲し、十九日午後一時より解停立會を開始したるも人氣拔に一轉して市況益々不振に陷いれり、試みに納會相場を發會相場に比較し見ると東株四十五圓、同新四十七圓、日本石油三十二圓、王子製紙二十圓、郵船十六圓方の低落を示し、漸次買疲れを覺ゆるに至りたり。

〔三月〕愈々二場所立會は實行せられたるも去月中旬以降の不氣配を受けて人氣更に引立たず、東株を始めじめ諸株一齊に低落の歩調を辿り、七日新東株は二百圓壓割れを演じて、頑强なりしマバラ買方を一掃し盡したる爲め、中旬に入りては概して人氣の落付を見るに至りたるも、折柄講和風は頻々として獨逸側より起りて戰爭の終局遠からざるべきを豫想せらるゝに至りて時局關係株は益々不勢に陷いり、銀塊相場の昂騰、金融の緩慢、貿易の順調等も何等買人氣を皷舞する力なく、受渡結了後に於ける人氣は却つて連月多數の正株を引きたる買方悲觀に傾きて納會市場は更に一段の不況を呈したり、事情此の如くなる故に納會相場は發會相場よりも概して安く、日本化學工業三十圓、東株二十圓、同新二十三圓、日本鋼管二十一圓、郵船十一圓、日本石油十二圓方の低落を示せり。

〔四月〕前月以來閑散不振に陷いりたる市場は依然として戾賣人氣に壓せられて活氣なく、內債四千萬圓募集の發表は、警戒勝なる場面をして彌が上にも警戒勝とならしめ、中旬に入るも當限の喰合は三十餘

萬株を擁して更に消化する模様なく、爲めに玉凭れの氣配となりて一層諸株の伸力を殺ぐに至れり、然るに十五日、日本銀行は突如として利子二厘方を引下げ、武富藏相は此の利下げを以て增殖しつゝある正貨を產業化せんとする政策の一端なりと說明し、又た世間一般は之に依つて兌換券の膨脹を來し、延いて財界の殷賑を齎らすものなりと解釋し、警戒勝なりし人氣は玆に漸く緩和して新規の買物も現はるゝに至り、月末に切迫すると共に愈々好勢を呈して當限喰合の懸念も何時しか雲散霧消し、東株は受渡後の納會市場に於て爆發的暴騰を演じたり、即ち納會相場を發會相場に比較すると東株は七十二圓、同新七十一圓、郵船十六圓、日本鋼管、化學工業、大阪商船、鐘紡、日本石油の如き何れも十數圓の騰貴を爲し二ヶ月に亘つて納會比較安を呈しつゝありたる形勢を玆に漸く一變したり。

〔五月〕ヴエルダン戰は激烈を極めつゝ觀る者をして一喜一憂せしめ、支那の南方諸省は遂に聯合政府を組織して北京政府に對立するに至り、加ふるに北京政府は財政窮乏の餘り機關銀行をして兌換を停止せしむるあり、而して久しく殷盛を持續したる海運界は平和見越の爲めか運賃の下向、船價の軟弱を示し來れる等、多少警戒すべき事情ありたる爲め、發會市場は前月納會の好調を受けたるにも拘はらず、豫期したる程の昂進を呈せず概して薄靴を示したるが、後場大阪安を入れて引際東株の崩落は俄かに氣配を軟化せしめ、上旬中は一高一低安持合を呈したり、然るに中旬に入り郵船會社は其の問題となれる利益配當案を決定し、多大の繰越を爲すことを發表したる爲め、同株に對する買氣再び起り、之を導火線として諸株共活氣を呈し、曩日の盛況を髣髴せしむるものありたるにも拘はらず、故資家は未だ警戒を解くに至らずして買物續かず、相場は再び伸び惱みの姿を呈して月末遂に氣崩れを爲すに至れり、即ち東株の納會相場は發會に比して親四十六圓、新四十三圓方の低落を來たせり。

〔六月〕納會崩落の反動にて發會市場は主力株の引返しを見たるも、戻賣りの人氣の依然盛んなる爲め新甫八月限の如き概して普通の値靴を示すに止まり、未だ昂進の氣勢を看取するに至らざりき、蓋し外には北海に於ける英獨の大海戰あり、キッチナー元帥の遭難あり、袁大總統の逝去するあり、又た內には三黨首領の會合に依つて政界動搖の說あり、前月中奔騰を見たる銀銅亞鉛等の金屬市價は一轉して漸落の歩調を呈し、海運界も時節柄閑散季に入りて運賃軟弱の色あり、中旬に入りては珍らしく五千八百萬餘圓の輸入超過を報ずる等益々氣配を重からしむるに至り、下旬に入りては日露新協約成立し正貨六億圓に達したるも未だ人氣を引立たしむるに至らず、受渡後日露協約の內容明白となるに及んで氣配俄かに沸騰し、納會市場は諸株一齊に活躍、特に東株は十七八圓方の暴騰を演じて沈鬱せる場面に一種の清涼劑を投じたり。

〔七月〕前月末は季節決算資金の需要と生絲資金の移動に依りて兌換券發行高は四億二千九百萬圓てふ異例の巨額に達し、制限外發行高亦三千八百七十一萬圓を算し、金融界漸く多事ならんとする時日本銀行は突如として利子二厘方を引下げ、又た政府は在米正貨一億圓を以て英國大藏證券に振替應募するに決し、一方歐洲の戰局は益々聯合軍側に有利にして、平和は獨逸の豫期するが如く速かに克復せざるべく、縱令平和となるも我が財界は之が爲め遽かに打擊を蒙ることなかるべしと云ふに一致し、從來專ら時局

關係株にのみ集中しつゝありたる買人氣は漸く有利確實なる一般有價證券にも放資せんとするの傾向を生じ、隨つて國債の需要增加して其の市價漸騰し、特に五分利公債の如きは額面を擡せんとするの勢ひありたれば氣配益々硬化して主力株の相場は何れも昂進を示したり、即ち發會市場は幾分伸び惱みの風情ありたるも新甫月九限は好調を示し四日の日銀利下げ以降は大體に於て尺進寸退、穩堅なる歩調を以て昂進を續けつゝ納會相場は發會の夫れに比して東株三十九圓、同新四十二圓、郵船、鐘紡各十七圓方の騰貴を爲し、新東株は久し振りにて三百圓を唱ふるに至れり。

〔八月〕發會市場は前月の好調を承け續いて好氣配を呈したるも、金融界は引締りの傾向ありたるに加へ舊盆季節資金需要激增の爲め俄かに繁忙を來し、加ふるに天候不良の爲め米作悲觀の聲高く、一般に利喰急ぎの人氣を構成しつゝありたる矢先、所謂バイカイ問題に對する裁判例規はれたる爲め、事情を詳かにせざる市人は不安の念に驅られて氣配の頓挫を見たるも、前月來旺盛を呈しつゝありたる端株買の人氣は相變らず順環的に活動しつゝありたるより遂に主力株も形勢を一變して納會市場は一齊に活躍奔騰を呈したり、之が原因として別に特殊材料を數ふるを得ざりしも、思ふに聯合軍側益々優勢にして巴爾幹の一二小國が之に加擔せんとするの形勢を生じ來れると、其の他軍需品注文の類りに到來しつゝあることや外國貿易の益々輸出超過を呈しつゝあることの如きは月末高を誘致したる有力なる材料ならん、例に依り納會相場を發會相場に比較すれば取引所株を除くの外何れも二三圓より四五圓方高く就中東京製鋼の二十四圓、東洋製糖の十八圓、上毛モスリン、東京毛織、東洋汽船の十餘圓高等は最も卓出せるものなり。

〔九月〕金融界は越月と共に益々緩慢の狀勢を持續し、露國大藏證券七千萬圓の募集成績は頗ぶる良好を示し又た政府の明年度豫算編成は順調に進行しつゝある等何等悲觀すべき材料なき爲め發會市場は前月末の活況を承けて一段の好調を呈し、續いて其後の數日間は活躍に重ぬるに活躍を以てするの盛況を示したるも、上旬末より中旬にかけては一般に利喰急の傾向を生ずと共に一時面白からぬ形勢を作り、後ち砂糖株が農作見越しにて强調を呈したる爲め他株も又た連れて回復の歩調を辿りたるも下旬は大阪筋大手の投げ退きを動機として形勢再び一轉し納會市場は一般に頭重き商狀を呈したり、然れども大體持合つた相場のことゝて月初めと月末とを比較すれば其の差極めて僅少、殆んど見るべき相場を認むる能はず、只だ一般が實質買に傾きたる結果として郵船、鐘紡、東洋糖の如き主力株は十圓以上二十圓近の騰貴を呈したり。

〔十月〕貿易、金融を始め財界各種の事情は益々株式高を誘致して已まざるものあるより大限內閣辭職して五日大命寺內伯に降下すると共に人氣の轉換を來して場面著しく活氣を生じ中旬に入りては雜株類に最も買氣あり乙立會は逐日奔騰を呈しつゝ之に對して聊か遜色ありたる主力株も又た中頃より活動を開始し下旬に入りては主力株及び雜株類を通じて一齊に活況を呈し來れる爲め實買高の如きも大いに激增し二十六日の實買高は三十三萬六千二百株、受渡前日の三期取組高は百二十三萬千四十株てふ空前の新記錄を作り斯くて三十一萬六千百四十株の大受渡を結了したる後の納會市場は正株不足の聲に煽られつ

、諸株一段の新高値に躍進し東株は新舊共に四百圓臺に買ひ上げたり、前例に倣ひ納會相場を發會の夫れに比較すれば久原鑛業百四十圓、東株九十八圓、同新株百四圓、郵船四十六圓、鐘紡の四十四圓高を始め何れも二三十圓方騰貴したり。

〔十一月〕前月末の大好調を承けて發會市場は活氣横溢、新甫一月限の如き爲めに著るしく大上鞘を買はれたるが其の後の數日間は鞘整理及び玉整理の爲めに却て諸株伸び惱みたり、然れども貿易と云ひ金融と云ひ何れも豫想外の順境にあり一として買人氣を興奮せしめざるものなき有樣なるより、玉整理及び鞘整理の一段落と共に諸株又々出直りを始め就中郵船株は二割八分の配當案決定に買氣を集中して四百圓臺に躍進する大相場を作りたるを見て他の汽船株も紡績、砂糖の如き有力株も又た悉く新高値へ吹き出し當る可らざる勢ひを示したり、然るに月末政府の金融政策に買方の警戒的利喰の賣物を喚發して市況一轉、諸株漸落の歩調を辿りつゝ翌月の發會如何を氣遣ふ人氣となりぬ、此月の株式受渡し高四十八萬八千六百十株なり。

〔十二月〕海外貿易の出超繼續により通貨の激增を來たし、金融の大緩慢と共に有頂天になりて買上げたる株式は、十一月に於て政府の金融調節策より突如英債壹億圓の引受けを動機に、俄然年末賞金の缺乏を訴へし銀行家の狼狽を惹起し、加ふるに支那公債も一億圓を引受けたりと傳へて金融界を險惡に陷らしめ、遂に初旬の株式下落となり、更らに獨帝の媾和提議に株式界は恐慌來となり、益々金融の硬塞株式の奔落となつて大正五年末尾の激落を演じたり。

即ち政府は年末決濟資金として毎年一億圓位の兌換劵增發を日銀に行はしめて極月の決算期を無事に經過し來りたるを、逆に民間資金より一億圓を引上げ茲に差引二億圓の通貨が不足することゝなりて爲めに、金融界株式界に小恐慌を起さしめたるは、政府當局が財界の觀測を誤りたるものにして其責を免かるゝ能はざるなり、隨つて流石の當局者も株式其他諸物價の暴落に驚き、日銀をして當時四億五千萬圓位の兌換劵を六億圓以上迄も發行して財界の救濟を行はんと、東京の有力銀行家に交渉せしめたるが、既に恐怖せる人心を救ふに由なく、株式業者同關係者に巨大の損害を被らしめ、全國株式取引所をも閉鎖せしめて、生糸綿糸の諸製品其他工業品に大打擊を與へ折角復活せんとしたる米界をも惑亂して、其餘弊の到る處實に深甚なるものあらしめたり。

斯の如く慘狀を以て大正五年の財界を送り、大正六年の金融界および株式界を迎ふることゝなりたる吾人は、これを如何に解釋して宜しきや今後の方針に就ては

須らく緻密の研究を要することならん。

茲に先づ金融界より大正六年を觀察せんか、年初に當りて英國公債七千萬圓の拂込みを控ゆるのみならず、露國大藏證劵の拂込み殘部は何時引き揚げあるや不明なるに搗て加へて諸會社株劵拂込みの到來するもの尠なからず、然かも引續き舊節季を控へて棉花資金輸入季に際し來るを以て、顧ふに金融の大緩慢を呈することはこれなかるべく、多少の引緩みを見るまでにて大勢を持續すべく、大緩慢を呈するは恐らく三月以後のことなるべしと思はる。

金融界の名士二三氏の意見左の如し

一　昨年末の金融は一時繁忙の形勢を呈したると同年財界の膨脹は實に常軌を逸したることなれば其歳末決濟期に於て金融の一時繁忙を呈するは當然の順序にして毫も怪しむに足らず然れども歳末放出金の越年後に回收するは疑ひを容れざる所にして歳末放出金の巨額なれば其丈益々其回收高を巨額に上らしむる理なり而して之を自然に放任すれば金融市場は再び資金の横溢に苦む筈なるが幸ひ同月は英國々庫債劵七千萬圓の拂込あるを以て一月市場の遊資は一時之に吸收さるべしされど何樣海外貿易の好勢現狀の如くんば資金は知らず〳〵に堆積し三四月の頃には又々資金の激增に苦むとならん。されば此遊資を如何に處分すべきやは實に本年に於ける金融界の大問題たるべしと思ふ云々。（佐々木勇之助氏談）

二　大正五年の我經濟界は實に未曾有の好況を以て經過せるに時恰も歳末に臨み金融の一時的不圓滑並に突發せる獨逸講和提議とに依り斯界の發展に一大頓挫を來たさんとせり即ち株式市場を始め諸商品市場は茲に急轉直下の一大暴落を演出し市人をして恐怖戰慄せしめたり此急發の現象は今後如何に推移す可きか即ち大正六年新春以後の經濟界は如何なる變動を齎さんとするか經濟上の觀測としては近年無比の興味を有するものにして且最も綿密なる考究を要するも

のならん。

想ふに昨年の我經濟界が未曾有の順調を呈せるは日露戰後に於るが如き空景氣などゝは全然其趣を異にし深き根底を有するものなるが故に此根底に變動を來たさゞる限り決して俄に挫折す可きものにあらざるなり斯界昂進の際に於ては往々にして一時的波瀾の襲來は免れざる所なれども苟くも根底あるものは相當の時日を經過せば直に生氣復活し來たるは自然の數なり抑も我經濟界が今日の雄大を成せるもの其根底既に深きものあり回顧すれば斯界發展の鋒鋩は現戰亂開始後の一ヶ年目即ち一昨年夏秋の交より閃めき來たれるが如し當時久しく萎縮せる商工業界の人氣は海外貿易の順調に促され稍活氣の色を呈せんとする折柄恰も即位御大典の擧行せらるゝありて全國民の元氣を皷舞し內地商工業界に著しく活氣を生せしめたり今次に於ける我經濟界の大局面が不振の時代より活躍の舞臺に入りたるの時機は先づ此時に在りとも謂ふ可きが爾來商工業者の元氣は漸く加はり來りたるのみならず局面飽迄我に順なりし爲め當年末の海外貿易尻に於て遂に金一億七千五百萬圓と謂ふ前古未曾有の大輸出超過を贏ち得たるに到れり多年來我經濟界に於ける殆んど唯一の宿望とも謂ふ可き此輸出超過なるものが茲に當年末に於て始めて實現せられたる次第なり斯く一大宿望の漸く達せられたるのみならず當一ヶ年に於て海外より我の受入超過勘定は既に金參四億圓に達し金融界は常に餘裕綽々として實力相當に充實せるものあるに拘はらず世人は尙警戒を解くに到らず彼の新事業計畫資金の如きも此一箇年に於て僅かに金五億百萬圓に止まり不振を極めたる前年に比し稍增加せるも平常の年に比し大差なきの有樣なりき。

然り而して昨大正五年に入りては貿易は益順潮に赴き輸出超過額は十二月中旬に於て既に三億五千萬圓の巨額を算し此外船舶賃並に貿易表外の軍需品等を加算すれば當年に於ける海外受入超過勘定は或は六億以上にも達す可しと謂ふ然

らば一昨年及昨年の両年に於て海外より受入れたる資金の總勘定は實に十億圓の巨額を算する次第なり斯くて外國債の應募並に外債の支拂等を差引き昨今正貨保有高は尚且七億千萬圓以上に達するの盛況を呈す現下我經濟界の雄大は實に斯かる根底の上に築き上げられたるものなるが故に到底一朝の風波に依りて破壞し去らる可きものにあらざるなり然らば昨年末に於ける媾和提議に驚怖せる一時的動搖の如きは斯界進展の根本的大勢より達觀すれば所謂一時の現象に過ぎざる可く時日の經過と共に本然の趨勢に立ち返る可きは當然なり況んや媾和提議は媾和開始にあらず聯合國の意氣は斯かる提議に一顧だもするものなきの現狀なるに於ておや更に況んや假令媾和開始となるも既に根底ある我經濟界が俄に土崩瓦解す可きの謂はれなきに於ておや媾和問題は元より特種特別の臨時的事業に打擊を加ふ可きが故に之れが開始と共に人氣の大動搖を來たす可きは勿論なるも我經濟界一般的の見地より視れば媾和後に於ても却て益堅實なる

發展を來たす可き望みなきにあらず否な斯かる抱負と注意とを以て進まざる可らず進取の途宜しきを得ば戰後こそ更に一層堅實なる基礎を樹立し得るに到る可し。

要之大正六年の經濟界は或は極端に襲はるゝことあらんも窮極するところ一層の大好況を呈するものあらんと想はる唯茲に注意す可きは苟くも財界に處せんとするものは盛時に在りて飽迄警戒心を解かざることに在り即ち治に居て亂を忘れざるを最も緊要とす昨年中の新事業資金の如きは一昨年の不振に比し既に著しく膨脹し十一月末に於て既に九億七千萬圓に達し年末迄には彼のレコードたりし明治卅九年の十億百萬圓を凌駕せんとするの勢を示せり又一般物價の如きも世界的暴騰を來たし之を戰前に比するに獨墺は十割英は六割八歩米は三割而して我國の如きも十一月末に於て三割三歩の暴騰を示せり近時經濟界大動搖の原因は主として物價暴騰事業濫興の反動來に在り本年の財界に臨み亦最も戒

心を要する所以なり而して更に交戰國の戰費を看るに交戰國全體の戰費は現今一日二億三千萬圓内外を要し昨年末迄に無慮千二百億圓を消盡したる計算なるが若し本年一杯を經過せば總戰費は二千億圓以上に達するの勘定なり實に交戰國の國富の盛　なる此未曾有の大戰費を負擔して綽々餘裕あるに至りては感嘆に餘りあり殊に吾々同盟國たる英帝國の資力の充實せることは大に人意を強くするものにして如何に暴慢なる獨國も遂に敗衂に歸すべきは敢て疑を容れざる所而して此大資金は如何に分配せられ又如何にして消却せらる可きものなるか其結果の全世界經濟市場に如何なる影響を及ぼす可きか最も深甚なる考究を要す可きものとす而かも我經濟市場は幸にして之れが影響に關しては常に受働的にして有利の地位に在るが故に之れに處するの道は唯飽迄有利有益に之を善用するにあるのみ輕擧盲動を慎めば即ち足るのみ。要之本年の我經濟界は矢張大樂觀を以て迎ふ可きものなり唯だ波瀾重疊端睨す可からざるものあるべく殊に媾和問題の種々變化して現はるべきは固より豫期すべきことにして其都度市場の徒に動搖するが如きことなきを希望して已まざるなり。（早川千吉郎氏談）

三　昨年末我經濟界に動搖ありしと雖も獨逸の媾和提議に喫驚したる一時の大變動にして財界の實體に毫も惡影響を被りたる結果にあらざりしなり故に當時も今春も共に財界に好調の一路の進みつゝ決して退却せざるは少しく思慮あるものゝ認めて疑はざる所なり即ち海外貿易の旺盛に伴ひて海外諸國より我國の受取る可き所謂受取勘定の多きことは本年も減退せざるのみか恐らくは本年内には正貨は四億乃至五億の增加を見る可き推算なりと云ふ果して然りとすれば我金融市場はそれ丈け資金の潤澤を增すの道理なれば其資金は之れを最も善用して國家經濟の發展を促すの資料たらしめざる可からざるなり即ち其第一策としては之れを健全なる事業資金に振向くるに在り事業の趨勢を見るに昨年の如きは隨分各種事業の計畫多く中には誠に必要の事業ありたれども亦實に如何はし

き計畫もありたるが如し石油會社の計畫の頻々として起りたるが如き當事者は眞實眞面目の積りなりしならんも局外者には到底感服出來ぬ代物なりしなり斯の如き企業は吾人の與せざる所なるも苟くも戰時戰後を通じて成立の見込みある事業の興起は歡迎す可きは勿論の事なりとして同時に其計畫は須らく大ならん事を希望せざるを得ず蓋し大資本を以てすれば凡ての點に於て優勝の地位を占むるの道理なればなり。

而して各種の事業はいづれも悉く大規模なれと云ふにはあらず種類によりて小規模を以て創む可きものも必要なる可きが要するに此六年に於て資金の增加は此方面に先づ投ず可きを唱道せざる能はず第二は對外放資なり我國の外債は尙ほ甚だ多し何時かは之を返却せざる可からず然も在外債の買入れ又は逆輸は實行上の困難ありて一に此方法に依賴する能はざるの事情あり故に英國々庫債券を引受けたるが如く今後露國公債の引受けも必要となる可く對支放資も起る可く英佛放資も亦起る可し斯の如く對外放資を以て餘裕資金を始末すると同時に對外債權を設定するに於ては一面將來我債務返濟の資源を作ると同樣にして國家の全體より見て誠に必要の事なりと云はざる可からず時局にして現狀に大なる變化なからんか我財界は產業資金を供給して尙ほ餘りある其餘裕を以て對外放資に振向け市場より餘計の遊資を處分するを得んか物價の暴騰をも抑制して健全なる社會を構成する中流階級の生活を容易ならしめ延ひて一般經濟界に波及する好影響は甚だ大なるものある可し吾人は本年も引續き斯の如き問題を考へざる可らざる我財界に對しては世界の表に突發事件の發生せざる限り樂觀せざらんと欲するも能はざるの感あるはこれを斷定するに躊躇せざるなり云々。

（池田謙三氏談）

轉して我が對外貿易の趨勢を見れば、前年既に巨額の出超を擧げたる上に今年も亦た順調を持續し得べく、否寧ろ前年に比して更らに一層の好況を見るべし、固

より他方に於て輸入も增進するに至らんも、目下各交戰國は戰爭の爲め平時の生産組織を破壞せられ、其製品を海外に輸出する能力を減退せられ米國亦之に準ずるの狀あるを以て、我國が外國品を購入せんとするも十分に輸入すること困難なりと云ふべし、況んや我が輸出品中既に巨額の先約を爲せるものあるのみならず、歐洲品の輸出困難なる結果は海外市場に於て之に代るべく、我製品の新販路を多々益々開拓されつゝあることなれば本年の輸出額が著しく增進するは疑ひを容るべからず、即ち前年の輸出超過額約三億六千萬圓に比し本年は更に是れ以上の輸出超過を見るべく其額或は五億圓近くに上らんかと豫想さる、尤も萬一媾和成立すと假定すれば右豫想額に變動を生ずるが如きも、其變動は寧ろ大正七年後の貿易に現はるゝものにして、本年の貿易には恐らく多大の影響無かるべし、斯の如くなれば本年の國際貸借は益々我國に有利と成り、現在七億圓を超ゆる正貨は本年に於て更に激增し多くは十二三億圓に上り少くも十一二億圓を下らざるを豫想し得べし、而して正貨の斯る增加は益々國力の基礎を鞏固にし經濟界の發展を將來更に好望ならしむる所以なりとす。

前述の如く貿易の出超加はり正貨の更に增加する結果は自ら內地資金を益々潤澤ならしめ斷じて其缺乏を感ずるの憂ひ無く、從つて本年に於いて金融の大に緊縮し金利の爲に奔騰するが如きは到底之を豫想し得ざる所とす、尤も舊臘一時緊縮に向ひたる金融は年初に一月遲れの節季及舊節季を控へ、又三月は大納稅期に當る等の爲め同期間に於ては格別の引緩みを見ざるべきも、四月に至れば緩慢の狀勢更に高まるべく而も正貨の增加は益々此緩慢を助暢せしむるに至らんや必せり、只昨年來財界の活氣を呈せると共に物價の騰貴甚だしく、其間商人の思惑買も起りて投機の傾向漸次顯著とならん模樣なれば資金の需要は各方面に於て增加すべく、加之金融緩慢遊資充實するに至れば政府は公債募集を實行して之を調節するに怠らざる筈なれば金融が異常の大緩慢を來すが如きことも無るべし、され

ばとて如何に資金の需要増大したりとて爲に金利を著しく騰貴せしむるの憂ひも無し。何となれば貿易の大出超に基く資金の潤澤は常に其需要を超過するに依り、政府は之を調節せんが爲め募債を實行するものなるが故に、其金融緊縮の傾向を生ずる場合に於ては政府の募債は當然中止せらるべきものなればなり。

金融及び貿易狀態は前來述ぶる如く些の悲觀を要せずとして結局戰爭の繼續如何との問題に至れば、吾人は何れの方面より觀察するも近く媾和の成立は覺束なきものと思ふ。

最近獨逸は媾和問題を提議して米國之れに和したるが如き態度あれば、或は近く媾和の成立するにあらずやとの懸念を爲すものあるも、獨逸が此の媾和を提議せる眞意に就いては大に疑ひなきを得ざるものあり、或は頽廢せんとする國內の人心を皷舞せんとする對內策なりと見られざるに非ず、或は昨年は一昨年と異り農作物の收穫減少せる模樣あれば實際食糧品の缺乏を來し戰爭の繼續を不利とせる餘儀なき事情に迫られ居れるやも知るべからず、其の提議せる眞意判然せず即ち其の根本意思の强弱を知るを得ず、隨つて此の媾和提議の前途に就いて豫めトするを得ざるも、尠くとも聯合國側の意氣、覺悟及び便宜より洞察し又は我が觀戰武官の視察談を綜合考察する時は戰爭は本年內に終熄すべき模樣なし、されば本年に於ける戰局も昨年同樣に繼續し我が經濟界は素より海運界までも引續き好況を呈すべきは殆んど信じて疑ひなきものゝ如し。

然らば之れを統計上より見て如何と云ふに、世界の好景氣は大凡十ヶ年每に循環し來る如く、好景氣三年、不景氣三年乃至四年、中景氣(整理時代)三年乃至四年と稱せらる、我國の實際に於ては好景氣の多くが戰爭の爲め猛烈なるを以て、何れも時日が短縮され三年續くたるは甚だ少きがごとし、即ち自明治五年至六年同自十一年至十三年同自廿年至廿二年同自廿八年至廿九年同自卅八年至卅九年にて今回歐洲大亂の結果我が財界に好影響を與へ實際に好景氣に入りたりと目すべき

は大正四年下半期からなりと思ふ。

即ち大正第一回の好景氣は既に一ヶ年半を經過し、今や足掛二年なれば或ひは終焉に近づきたるものならん歟との議論もあれど、明治第一回の好況時代を除き、其他は凡て事業の勃興變じて起業熱となり再轉して投機熱となれるに、今回は更に起業熱なるものを認めざるのみならず、日清日露の如く投機熱沸騰の結果主力株にて二三百圓も一氣呵成に奔騰するてふ凄き處を認めず、而して其反動は必ずや資本の缺乏――金融の梗塞――信用頽廢――生產過剩なるものにてあれども、十二月の暴落は金融の梗塞のみにて資本の缺乏は全く認むるを得ず、株式關係者中には或ひは信用を失墜したるものもあらんが、之れは極一小部分にして又生產過剩も皆無なりしが如し。

殊に從前の好景氣時代經過には海外貿易は何時も入超となり、正貨の流出相亞ぎて爲めに通貨の不足を來たし更らに兌換劵の大縮少となりて、反動時代を現出し來りたるに今日は猶夫と正反對にして、歐洲戰爭和の成立せざる限り先づ此點は懸念なきもの丶如し、斯の如く觀察し來るときは好景氣の頂點を通過し反動時代に入りたるものとは甚だ信じがたく、即ち各種の經濟的要素を具備し居らぬものと推斷するを得べし、されば舊臘の高値は決して天井に非ず後日眞の天井らしき熱狂相場を見得るならんと思はる。

以上論するところを以て財界の前途と四圍の形勢とに鑑み、大正六年の株式相場如何を考察するときは、略々大體の推斷を下し得べしと雖とも、この儘一直線に昂上を續くる歟或は亦た近く大暴騰を演じて一轉反動時期に入る歟、こは最も研究を要する問題にして輕々に斷定すべきものにあらず、斯界の重鎭にして前年來當り屋の評ある織田昇次郎氏の談を聞くに

大正六年度の株式の景況、强弱如何を今日に於て豫斷することは頗る困難である。殊に株の浮沈と云ふものは眞に時々刻々に變化し一日の內に於ても午前と

午後とに依つて異る位であるから半年後のことなどは神ならぬ身にとりては至難と云ふよりも寧ろ不可能のことゝ云ふべきである、然しながら歐洲戰爭を前提として豫想すれば强がち大なる失敗を見ぬだらうと思ふ。大正五年度の株が主として歐洲戰亂若くは歐洲戰亂の影響たる金融、貿易、工業其他の事情に依つて騰落したと同じく大正六年度の株界も亦平和克復迄は否平和克復後の當分も矢張り歐洲戰亂若くは歐洲戰亂より來る結果を主たる材料として變動するのであるから歐洲戰亂の文字は今日では株の材料として陳腐の感を免れないにも拘らず、前途尙依然として益々最大有力材料である。其處で大正六年に於ける歐洲戰亂はどう變化するかと想像するに媾和の成立は如何に早く見ても本年中位は掛かるだらうと思ふ、最近問題となつた單獨媾和のごとき亦た獨逸の媾和提議の如きも聯合國の意氣を發揮したものとすれば、媾和は大正六年どころか或は獨逸が實際に窘窮するまでは之れなきものと云はなければならぬ、然し大正六年度に於ける戰況如何と云ふに今日迄の大勢より按ずれば之れ又聯合軍に有利と云はなくてはならぬ、現に日本及米國あたりへ注文した聯合國の軍需品は目下盛んに輸送中であるから聯合軍は今後益々振ふであらうし、之れに反して同盟軍は劣敗の地位に陷るであらふ。

獨逸が媾和を欲して百方策を廻らして居るのも此の點にある、株の材料としては戰爭終熄よりも媾和會議の方が遙かに重要問題であつて媾和會議中の株相場こそは一喜一憂定めなく一報々々毎に騰落の動搖甚だしく蓋し株界空前の大亂調を演ずるであらうが、大正六年度に於て此の媾和を見ないとすれば戰爭に於ける株の動搖は大正五年度と左したる違ひはないと思はれる。

次に大正六年度の政界如何と云ふに現内閣に對する臨時議會の形勢もいまだ分らず再たび議會の解散を見るや又内閣の更迭を見るや其邊不明であるが四圍の情勢より觀て或は臨時議會は無事平穩に終るだらうとも思はれる縱令憲政會及

び國民黨あたりから不信任上奏案などが提出さるゝとするも、それは種々なる事情の爲めに可決するに至らぬであらうと思ふ、然し政界の雲行きは何時如何に變化するか分らぬが若し現内閣が辭職するやうなことがあつたらば如何と云ふに既に政局は大體に於て海軍補充、二個師團の二大暗礁が除去された今日であるから内閣更迭は其形勢に依ては一時多少の惡影響を株界に與ふるだらうが夫れも要するに單に數日間の小波動のみに止まり間もなく常調に復するばかりでなく新内閣の顏觸如何に依つては或は一時歡迎相場を見ないものでもないから畢竟するに政變はあるとしても最早や數年前の如き大々的惡影響を與ふる恐がないから六年度に於ける政變の有無は左して株の上に懸念する必要はないと云はなくてはならぬ。外交方面にても歐洲戰亂中に日本に不利なる外交的大問題が歐洲から來るだらうとは思へず又戰亂終熄後に於ても媾和會議の延引は別として其他の問題に於ては其國力に於て獨墺二國が容易に何事をも爲し得ないことは勿論で英、佛、露、伊の協商國は無論戰後も益々結合を鞏くし特に日本に信頼するより外なきは勿論であるから要するに外交上六年度に於ては大局に影響するが如き問題は起らぬと信ずる。

次に大正六年度の財界は如何と見るに何人と雖も樂觀し得ないものはあるまい歐洲戰亂の最中に於て反つて時局の爲めに貿易は大出超を續ける造船海運界は未曾有の大好況を示す、軍需品の注文は引續き入込んで關係工業は大繁忙である、連れて正貨は激增する金融は彌が上にも大緩慢で歐洲戰亂も餘りに短くないと見ては否應なしに財界の景氣は引立たざるを得ない譯である。これ等の點即ち株の騰落の原因となる如上の種々の觀察を綜合して見ると、大正六年度の株界も大正五年度に於けると同じく好況を呈するものと豫想するより外はない、勿論如上の原因は何れも時々刻々に變化するものであるから必ず其れと斷言することは出來ぬ。云々

右の所説は頗る肯綮を得たるものにして斯界の老成家小池國三氏、小布施新三郎氏の如き大體に於て其觀察に大なる差異なく、等しく前途を樂觀せるものゝ如し。

今此の人々の意見と、金融業者の見込みと、財界各方面の觀察とを以つて四圍の狀況に細心の注意を拂はゞ、如何に波瀾多き株界の大海原に乘り出すも、大なる失敗はこれなかるべし。

然り、然らば吾人の執るべき針路や如何、賣るべきか買うべきか其時機は三月か五月か前季か後季か徐ろに次項に語るところを見よ。

三要素

少ない證據金で澤山の賣買は爲さゞること

損をしても直々に取返さうと焦慮らぬこと

四圍の事情と金融界とに注意を怠らぬこと

上半期の豫想

前來既に述べたる如く財界の大勢にして未だ一轉せざのるもとすれば、年初の相場は假令獨帝の媾和提議ありたりとも亦た中立國の斡旋ありとも決して安かるべき理由なく、加ふるに米國大統領ウイルソン氏の調停其効を奏せざるに於ては軍需品の注文は更らに增加を示し、多大の出超を豫期することゝなりて財界先づ好調を呈し、政府者は舊臘に於ける失態に鑑み一面には議會解散後の人氣取り策として積極的經濟策を表現し來たるべければ、銀行業者も次第に安心して警戒を解くことゝなり一昂一低の內に底を固めて漸次好況に向ふことなるべし。

右の見地によりて月別に斯界の景況を觀測せんか先づ一月初めに於て少しく活動を顯はし、船舶株紡績株を筆頭に砂糖株、炭礦株等見るべき昂騰を期待し得べく尙以後多少の波瀾曲折ありとも深き押目はあらざるべく唯此間政界案ヒ喰合過多

の玉整理等株價の進路を阻害することあらんがこれ等は年中行事の一にして強て憂ふるに足らざるべく、一方大阪方にありては東京勢と力を協せ郵船の增資運動を劃するありて稍々好望を屬し得べしと云へば此方面よりして一般の株價に好影響を與ふることもあるべし、されど露國の動搖各國の輸入禁止等貿易上の打擊もあれば高値は買はざるべく或は買方の嫌氣投げによりて崩るゝところあらんかなれど一方各會社の收益狀態の良好を眺めては人氣の落ち附きと共に遊資筋の買進みもあるべく旁々惡材料の突發せざる限り先づ弱持合を持續すべく三月の末ごろまでは未だ花々しき活躍は期待し能はざれども、前にも述ぶる如く金融大緩漫期に向ふことなれば此月を最後として四月より愈活動期に移り五月に掛けて暴騰を演ずべし即ち主力株の最たる郵船株は此月の中旬に決算の發表あるべく配當增加は素より多大の繰越を見るべければ同株に對する買氣は必然再び起りて之れを導火線に諸株に活氣を添ふべく東株船舶株紡績株等其他の端株類も物によりては豫想外の高値を見るべく其好調六月に及ぶべければ、時に曲折を見るとするも上半季の市況は大體に於て舊臘大打擊の創痍を治癒さるを得べけん。但し六月末季節資金の需用あることは忘るべからず。

下半季の豫想

上半季の豫想は以上の推論にて大なる謬りなかるべしと信ずるなれども、下半季は複雜なる四圍の事情と歐洲戰爭の成行とによりて大なる波瀾を捲き起すことならんと思はる然れど歐洲戰爭は如何に變化しても未だ容易に終局を告ぐる能はず、又戰線とても何百里に亘る大區域なれば一たび進擊し或は退却したる後は敵間の距離甚だしく、且つ更らに次ぎの對戰をなすの準備として人員軍需品等の補充に二三ヶ月を要すべければ、八九月頃までは到底大なる決戰あらざるべく、十月頃よりは休戰期に入るを以て茲に再たび中立國より媾和問題の提出を見るやも

知れず、又獨逸の旗色如何によりては支那に如何なる事變を惹起するか或は又米國に於ける各種の問題も如何に變化するか又は他の新問題を發生するか多少の懸念なき能はず、隨つて戰爭と外交問題とに注意を要することゝ思ふ。

又た內國的諸材料としては弗々政治問題も發生すべく內閣の交迭も場合によりては現出さるも知れず、其形勢如何によつては株式界にも多少の惡影響を及ぼすことあらんも夫れは一時の小波動に過ぎずして大なる惡影響はあらざるべしと思はる、又た農作物の方面にありては米、砂糖等總て豐作續きの後なれば是れ亦如何なる變化あるやも知れず、他方には生糸の如きも天候と氣溫の如何によりては大なる違作なしとも云へず、事業界の成行きは再たび起業勃興の兆候なきやこれらの觀察と人氣の消長等は余程の細心を要さざるべからず。

次ぎに財界の趨勢如何、これは何人も樂觀し得ざるものはあらざるべく、貿易の引續き大出超軍需品の輸出船舶の運賃及びチヤーター料等正貨の激增は株式市場の景氣を彌が上にも引立つべけれど、唯茲に注意すべきは苟くも市場に輸贏を爭ふものは、盛時にありて飽くまで警戒心を解かざる事にありて、即ち經濟界時々の消長は常に經濟的心理作用によつて左右せられつゝあることを忘れざるにあり殊に相場の如き群衆心理如何によつて意外の騰落を見ることあれば、大體に於て悲觀すべきものなしとて必ず好況とのみ斷言することは出來ざるべし。

尤も下半季に移りての財界の狀況四圍の大勢が右の如き豫測にして大過なからん乎、七月の相場は先づ高きものと斷定して過りなかるべし、何しろ各會社の決算狀態は發表せられ、紡績、船舶、砂糖其他すべての會社が豫期以上の好成績を收め、一方貿易金融を始め財界各種の事情は益々株式高を誘致して已まざるべければ相場の昇騰を見る敢て怪しむに足らず。

然れども上半季の株式界は大體に於て舊臘の創痍を治癒したるものなる故市人は未だ全く警戒心を解くに至らず、七月以後の相場は其豫後なれば好況裡にも波瀾

曲折を見るべく漸次に第二の底を堅めて月末より活動に入り、八月は多少の挫折を見ることありとも毎旬の出超と、正貨の激增、我が財界の大なる盛況を眺めては警戒心强き市場の人氣も遂には有頂天となりて次第に熱狂狀態を現はし來るべく、金融大緩慢期たる九月より十月に入りては主力株を始め諸株一齊大暴騰を告ぐることならん。

さりながら十月下旬より十一月初旬の大高値は先づ本年中の天井として、其後は漸次下落の步調に向はん、又此間金融業者は昨年の失態に懲りて多少放資に警戒を爲すべく金利も幾分引締まるべければ、大體の方針は此の頃よりは賣の一直線に向つて進むを可なりとすべく、唯波瀾重疊端倪すべからざるものあれば輕擧盲動は愼しまざるべからざるも、兎に角絕體に買にあらざることを聲明して憚らざるなり。

左表は大正五年十一月の高値及び十二月嬉和電報後の大變動相場を示せるものなり

最近に於ける諸株券の高値と安値

種目	額面拂込	時價	前期配當	利廻	決算期	十一月中最高値	十二月中最低値
取引所株	円	円	割	割		円	円
東京株式	50,0	263,0	3.00	.57	5,11	460,0	233,0
同新株	25,0	242,0	3.00	.31	5,11	445,0	235,0
東京米穀	50,0	145,0	2.20	.76	5,11	196,5	135,0
同新株	25,0	120,0	1.60	.33	5,11	159,	100,0
横濱取引	25,0	66,0	.92	.35	5,11	108,0	63,0
大阪株式	50,0	330,0	3.00	.45	5,11	630,0	340,0
船舶倉庫							
日本郵船	50,0	282,0	2.80	.50	4,10	400,0	260,0
同新株	12,5	166,0	2.80	.21	4,10	257,0	150,0
大阪商船	50,0	242,0	3 00	.62	6,12	290,0	195,0
同新株	25,0	210,0	3.00	.36	6,12	268,0	165,0
東洋汽船	50,0	116,5	1.50	.64	2, 8	147,0	103,0
同優先株	50,0	106,0	1.50	.70	2, 8	145,0	103,0
紡績株							
鐘淵紡績	50,0	217,0	3.00	.69	6,12	286,5	204,0
同新株	35,0	182,0	3.00	.57	6,12	256,0	170,0
富士瓦斯	50,0	137,0	2.00	.73	5,11	184,5	154,0
同新株	25,0	87,5	2.00	.57	5,11	137,0	81,0
日清紡績	20,0	58,5	1.60	.55	5,11	87,0	53,5
東洋紡績	50,0	170,0	2.50	.74	5,11	239,0	145,0
同新株	15,0	95,0	2.50	.40	5,11	138,0	75,0
尼崎紡績	25,0	157,0	4.00	.64	5,11	260,0	140,0
摂津紡績	25,0	132,0	3.50	.66	5,11	162,0	135,0
東京製絨	50,0	82,5	1.20	.73	6,12	100,0	78,0
東京毛織	50,0	81,0	1.20	.59	6,12	151,0	75,0
東洋毛織	50.0	57,0	1.20	.50	3, 9	95,5	59,0
大阪毛織	50,0	125,0	2.00	.80	6,12	137,0	125,0
東京モス	50,0	132,0	2.40	.90	5,11	186,0	123,0
同新株	12,5	52,0	2.40	.57	5,11	90,0	46,0
東洋モス	50,0	85,0	1.50	.88	5,11	120,0	67,0
上毛モス	50,0	62,0	.80	.48	6,12	85,0	60,0
同新株	30,0	43,0	.80	.56	6,12	66,0	41,0
製糖株							
大日本製糖	50,0	97,0	1.50	.77	5,11	125,0	92,0
同新株	12,5	42,5	1.20	.35	5,11	50,0	43,0
臺灣製糖	50,0	120,0	1.60	.66	6	144,5	108,0
同新株	22,5	65,0	1.60	.56	6	84,0	58,0
鹽水港製糖	35,0	97,0	1.70	.61	6	133,5	92,0

最近に於ける諸株券の高値と安値

種目	額面拂込	時價	前期配當	利廻	決算期	十一月中最高値	十二月中最低値
	円	円	割	割		円	円
東京電氣	50,0	280,0	2.00	.35	5,11	267,0	250,0
東京瓦斯	50,0	59,0	.70	.59	6,12	68,7	56,0
同新株	37.5	37,5	.70	.70	6,12	52,0	42,0
石油炭礦							
日本石油	50,0	153,0	3.00	.94	6,12	187,0	145,0
同新株	32,5	122,0	3.00	.80	6,12	155,5	110,0
寶田石油	50,0	99,5	1.50	.75	3, 9	118,0	93,3
同新株	12,5	48,0	1.50	.39	3, 9	68.5	45,0
北海炭礦	50,0	73,0	.50	.34	6,12	104,2	71,0
同優先株	30,0	58,0	.75	.38	6, 2	87,0	48,0
九州炭礦	25,0	26,5	繰越	……	4,10	51.0	26,0
磐城炭礦	50,0	220,0	2·00	.45	5,11	235,0	215,0
入山採炭	50,0	138,0	2.00	.72	5,11	197,0	130,0
雜株							
久原鑛業	25.0	240,0	3.00	.31	6,12	390,0	220,0
大日本人造肥料	50,0	71.0	1.00	.62	6,12	105.0	65,0
同新株	17,5	37,5	1.00	.47	6,12	68.0	35,0
日本皮革	50,0	98,0	1.70	.86	3, 9	139,0	95,0
ハイカラ浦製作	50,0	1 0,0	2:00	.83	4,10	160,0	118,0
芝浦製作	50,0	140,0	1.00	.36	5,11	127.0	110,0
日本セメント	20,0	42,5	.80	.47	3, 9	67,5	37,0
日本活動寫眞	40,0	27,0	.80	1.18	1, 7	40.5	23,0
日本窒素肥料	50.0	145,0	1.50	.51	6,12	202,0	150,0
日本學生服	50,0	170,0	3.50	1.00	5,11	225,0	163,0
化學繊維	20,0	102,5	1.50	.25	5,11	118,0	90,0
電氣化學	50,0	93,0	1.10	.59	5,11	85,0	85,0
横濱電鍍	50.0	77,0	1.20	.78	1, 7	87,0	75,0
東洋捕鯨	23,0	101,5	.20	.18	5,11	36,5	24,5
横濱倉庫							

最近に於ける諸株券の高値と安値

種目	額面拂込	時價	前期配當	利廻	決算期	十一月中最高値	十二月中最低値
	円	円	割	割		円	円
東洋製糖	42,5	187,0	2.00	.45	6	205,0	175,0
同新株	27,5	120,0	2.00	.46	6	155,5	115,0
明治製糖	50.0	119,0	1.70	.71	6	152,0	108,0
同新株	12.5	52,0	1.70	.41	6	81,5	53,5
新高製糖	35,0	100,0	1.70	.60	6	138,0	98,0
沖臺製糖	50,0	76,0	1.20	.78	6	112.0	75,0
帝國製糖	30,0	89,0	1.80	.61	6	115,5	88,0
臺南製糖	22,5	40,5	1.00	.56	6	53,8	38,5
鐵道株							
南滿鐵道	100,0	137,0	.80	.58	5,11	164,0	130,0
同新株	20,0	58,5	.80	.27	5,11	83,0	57,0
東武鐵道	50,0	68,0	.75	.55	3, 9	77,0	65,0
成田鐵道	50,0	54,0	.70	.65	3, 9	60,0	54,0
京濱電鐵	50,0	40,0	.48	.60	5,11	50,0	25,0
製紙製粉麥酒							
富士製紙	50,0	118,0	1.70	.72	5,11	138,0	100,0
同新株	35,0	113,0	1.70	.5	5,11	130,0	95,0
東京板紙	50,0	87,0	1.60	.92	5,11	115,5	80,0
王子製紙	50.0	133,0	1.80	.67	6,12	178,5	125,0
同新株	25.0	100,0	1.80	.45	6,12	143,0	95,0
日本製粉	50.0	92,0	2.00	1.10	5,11	132,5	93,0
日清製粉	50,0	92,0	1.50	.81	5,11	113,0	90,0
東亞製粉	20,0	24,0	1.00	.83	6,12	34,5	20,0
大日本麥酒	50,0	145,0	1.60	.55	6,1	158,5	130,0
同新株	15.0	56,5	1.60	.42	6,12	78,5	50,0
加富登麥酒	50,0	30,0	繰越	……	6,12	45,0	25,0
同新株	40,0	20,0	繰越	……	6,12	34,8	17,0
麒麟麥酒	50,0	65,5	.90	.69	6,12	99,0	55,0
帝國麥酒	25.0	37,0	.80	.54	5,11	38,5	30,0
電氣瓦斯							
東京電燈	50,0	64,0	.80	.63	5,11	77,0	62,0
同新株	45,0	55,8	80	.64	5,11	69,0	51,0
日本電燈	25,0	22,5	.45	.50	5,11	31.5	22,0
利根發電	50,0	56,0	.60	.53	3, 9	62,5	53,0
桂川電力	35,0	60,5	1.00	.58	5,11	76,2	57,0
猪苗代水電	22,5	35,0	.55	.36	3, 9	40,0	32,0
鬼怒川水電	50,0	30,5	.50	.81	5,11	41,0	28 0
九州水力	25,0	42,0	1.00	.60	5,11	58,5	41,0

以上說くところを以て既に大要を盡したりと思惟すれども、尙ほ注意を要すべき一事は、賣買思惑者たるもの常に各會社の性質及び營業狀態を考査し、資本金、積立金等は素より前期の配當、繰越金、會社將來の見込等犀利の觀察を怠らざるにあり。而して事業の性質が獨占的か、將た又競爭ある事業か、其の競爭に對抗する方法あるか、今後尙ほ擴張の見込みあるか、會社の基礎は如何、これ等の諸點を考究し其株式の價格に比較し、その上相場の變動に細心の注意を用ふれば先づ大體に於て放資の途を誤らざるべく、投機に於て成功し得べきなり。

卷末會社現狀一覽は各會社の內容、營業の狀況今後の發展等を記るしたれば、既往將來を觀察するに於て其利益尠少ならざるべしと信ず。

附錄

◎南滿洲鐵道株式會社

本社 大連市東公園町
支社 東京市麴町區有樂町　決算期三月

◎設立　明治三十九年十一月二十六日
◎資本金　二億圓（內拂込一億三千二百萬圓）
◎株數　政府持株百萬株（一株額面百圓全額拂込濟）
第一回募集株二十萬株（一株額面百圓全額拂込濟）
第二回募集株四十萬株（一株額面百圓內三十圓拂込）
未募集株四十萬株
◎積立金　千八百十七萬二千餘圓
◎社債金　一億千七百十五萬六千圓（英貨千二百萬磅）
◎配當率　政府持株年二分五厘　普通株年八分
◎後期繰越金　二百八十五萬七千餘圓（大正四年度決算）

◎五年度の營業狀況は、年度更改以來前年度以上の盛況を持續し、殊に下半期に入りては、旅客の增加したる上に、滿洲特產物豐作の結果、鐵道運輸貨物著しく增加し、前年同期に比し日々三萬圓以外の增收となり、時としては一日十萬圓以上の收入を擧ぐるの好況にして今後も尙ほ此狀況を持續するに於ては、前々年度と同じく、多大の增收を擧ぐるを得べく、少くとも前年度に比し二百萬圓以上の大增收に達すること、思はれる、尤も本年度は新規計畫事業の多き割合に、資金の稍や不足せる憾あるを以て、場合にふれば其一部分を

次年度へ繰延に決せんにも限らぬ。又株主年來の希望たる配當制限撤廢、株式の所得稅免除並に日銀見返品擔保加入の問題は、今尙未解決の儘にあるも、此内の配當制限撤廢問題だけは遲くも五年度決算期頃迄に、何等かの形式の下に解決さるべき模樣である。尙ほ本社の前途には東清鐵道南線引受、吉長鐵道借款てふ大問題を初め、炭礦經營の擴張、製鐵事業の着手、奥地開發の爲にする支線敷設等有望なる事業多々あるが、此資金調達に就ては、略ぼ社債募集に内定せるやに傳ふるものあれど、最近關西の大株主一派は、社債募集に代へて未拂込徵收、未募集株募集を以てせんことを要求せんとしつゝあれば、此要求の容れられるや否やは、大いに注意すべき必要がある。

◎東武鐵道株式會社

東京市本所區小梅瓦町四九

◎設　立　明治三十年十一月一日　決算期三月、九月
◎資　本　金　九百萬圓（内拂込五百二十四萬四千圓）
◎株　數　舊株五萬四千八百株（一株額面五十圓、全額拂込濟）第一新株五萬三千株（一株拂込二十圓）第二新株七萬二千二百株（一株拂込二十圓）
◎積　立　金　二十一萬六千四百圓
◎社　債　金　二百四十二萬五百圓
◎配　當　率　年七分五厘
◎後期繰越金　一萬七千七百圓（九月末）

前期に於ける營業總收入は五十七萬三千百餘圓を算し、内營業費三十七萬三千九百餘圓を引去り、純益十九萬九千餘圓にして、コレに一萬千餘圓の前期繰越金を加へたる二十一萬八百餘圓より、積立金一萬圓、株主

配當金十八萬三千百餘圓（年七分五厘）を支出し、一萬七千七百餘圓を後期繰越となしたるが、コレを前期に較ぶれば、純益に於て約八千圓配當率に於て一厘方の增加である、下半期は一般貨物輸送の旺盛なるに加へて、穀類の騰貴せし爲、其出廻り漸次增加しつゝあれば、收入は前期に比し可なり增加すべく期待される。次に本社は十月一日を以て、第二新株一株に付五圓この合計三十六萬一千圓の拂込を徵收し、上半期の決算に仕拂手形及借越金さある二百三十三萬六千餘圓の内拂に充當した、又近く三百萬圓の社債を發行し、現在社債二百四十二萬五百圓を償還する筈である。尙ほ本社は最近佐野町より越名に至る線路を廢し、佐野町より鹿沼に至る輕鐵未成線を、更に太田驛より山田郡相生村に延長し、足尾鐵道の相生驛に連絡すべき計畫を決議した、尤も此實行期及び資金調達方法は猶ほ未定である。

◎成田鐵道株式會社

千葉縣印旛郡成田町成田八二一　決算期三月、九月

◎設　立　明治二十六年十二月
◎資　本　金　二百四十二萬五千圓（拂込濟）
◎株　數　四萬八千五百株（一株額面五十圓、全額拂込濟）
◎積　立　金　二十一萬八千九百圓
◎特別資金　六萬六千二百圓
◎配　當　率　年七分
◎後期繰越金　八千五百圓（九月末）

營業狀況は、財界の好調に伴れて徐々に良好に向ひ、五年上半期の如きは、豪雨の被害に依り一部線路の不通を來せしにも拘らず、其收入は前期に比し三千餘圓增加の十一萬七千餘圓を計上した、尤も此增加益金を

擧げて株主配當に充當するとも、漸く前期に比し二厘方增率するに過ぎざりしを以て、配當率は前期同樣年七分に止め、殘餘は積立及び後期繰越として社內に保留したのである。然るに下半期は、乘客の來往益々頻繁となりつゝある上に、石炭砂利等の貨物頗る增加し、米穀・肥料、土木材料等各種各般の輸送頗る盛況を呈しつゝあれば、尠くとも前期に比し五七千圓の增益を齎らすべく、隨つて株主配當も五厘乃至一分方增率し得べく豫想さる。

◎京濱電氣鐵道株式會社

神奈川縣橘樹郡川崎町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治三十一年三月
◎資　本　金　五百十萬圓（內拂込四百五十九萬圓）
◎株　數　舊株五萬一千株（一株額面五十圓拂込濟）新株五萬一千株（四十圓拂込）
◎積　立　金　二十五萬八千六百圓
◎社　債　金　百八十萬圓
◎配　當　率　年五分五厘
◎後期繰越金　二萬五千七百圓（十一月末）

五年下半期の營業純益は、十三萬六千圓にして、前期に比し約壹萬六七千圓の減收は後半雨天續きの爲にて、別段院線電車開通の爲の打擊とも思はれざれど、前年同期（卽ち院線電車開通前）に比し、京濱直通乘客に於て三萬八千人を減じたる所を以て見れば、矢張り院線の爲に迫害せられつゝあるものと見らるべく、而して會社の收入は工業界の活躍經濟界の好況に負ふ所少しとせざれど、沿線短區間交通の增進が其の主なる原因

を爲したる者の如し。爾來本社當事者は、鋭意この方面に努力しつゝあるのみならず、副業たる電燈電力の供給も、沿道町村の發達と共に益旺盛に赴き、又川崎町及其以南の埋立地附近は漸次發展の機運に向ひ需用日々に增加しつゝあれば、假令京濱直通乘客に於て院線の打擊を免れざるにもせよ、短區間乘客の增加副業等によりて之を償ふを得べく、本社も漸次發展の時運に向ひ居れるものゝ如し。

◎橫濱電氣鐵道株式會社

橫濱市西戶部町三三〇　決算期五月、十一月

◎設　立　明治三十五年四月
◎資　本　金　六百萬圓（內拂込四百六十五萬圓）
◎株　數　舊株六萬株（一株額面五十圓全額拂込濟）新株六萬株（二十七圓五十錢拂込）
◎積　立　金　十八萬七千圓
◎社　債　金　九十萬圓
◎配　當　率　年五分
◎後期繰越金　二千三百餘圓（十一月末）

本社の營業狀態は、昨年來頗る不振を極め、株式の市價拂込額以下にあるより、株主の不平尠からず、何とか營業方法を改めざるべからずとは、豫ての問題なりしが、會社側にては愈よ其改善方法として、乘車賃引上げを斷行することに內定し、株主總會の決議と其筋の認可を得次第實施することゝしたり。されど本社には電車並に運輸設備等今後尙改善すべきもの多々あれば、乘車賃引上げが卽ち配當增加なりとは速斷するを得ざるべく、根本的改善を期せんは容易の業にあらず。

◎日本郵船株式會社

東京市麹町區有樂町　決算期三月、九月（四月、十月現在株主に配當す）

◎設　立　明治十八年十月
◎資本金　四千四百萬圓（内拂込二千七百五十萬圓）
◎株　數　舊株四十四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株四十四萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　五百七十一萬三千圓
◎配當率　年二割八分
◎後期繰越金　千八百九十六萬千圓（九月末）

本社四年下半期の利益金は株主の繰期以上に激增し、其處分方法に就き當局者と株主との間に意見を異にして久しく決せざりしも、仲介者の斡旋によりて、遂に積立金其他の制度に改正を加へ、同期の配當を上半期の一割五分に比し五分增しの二割とし、七百二萬九千餘圓を次期へ繰越し、適當の時期に於て適當の方法により處分することに決したりしが、五年上半期の利益金は又復た前期よりも七百六十二萬七千餘圓の激增を來し、總額千七百二十四萬三千餘圓に上り、株主中には相當の增配を希望するものありたれども當局者は當期は引續き戰時異常に屬し、前途のこと尙豫測するを得ずとふ理由の下に、配當率は僅々前期に比し八分增しの二割八分に止め、利益金の大部分は之れを次期へ繰越すことゝして、兎も角も總會の承認を經たが、其繰越金は實に千八百九十六萬千圓てふ巨額である。偖て本社の利益金が如何にして斯く激增を來せしものなるかと云ふに、海外航路の好況は依然たるものありし上に紐育航路の新設あり、運賃率亦一般に昂騰し、且

つ新造船の就航するもの更に加はりたる結果に外ならざるが、此の最後の新造船の就航が何れも上半期の半以後なりし事實に察し、又近く竣成すべき船舶のある由て見るも、本社の利益金が今後尙增加すべきことは明かである。いづれ適當の時機に於て增資を見ることあるべく、利益金の處分問題こそ觀ものならん。

◎東洋汽船株式會社

東京市日本橋區通一丁目　決算期二月、八月

◎設　立　明治二十九年七月
◎資本金　三千二百五十萬圓（内拂込千七百八十七萬五千圓）
◎株　數　舊株二十六萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株三十九萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　百五十萬九千六百圓
◎社債金　五百二十萬圓
◎配當率　年一割五分
◎後期繰越金　七萬六千四百圓（八月末）

本社の資本金は、五年七月二十八日の株主總會にて、從來の千三百萬圓二十六萬株に、千九百五十萬圓三十九萬株を增し、現在の三千二百九十萬圓六十五萬株と爲すことに決し、九月一日現在株主の舊株一株に一株、優先株一株に付二株を割當て、普通株と優先株との區別を廢し、其總數二十六萬株を舊株、增資による三十九萬株を新株としたのである。本社の成績は海運界の好況に連れて益良好に赴き、五年上半期の如きは、本社財源の一と稱へられし地洋丸を喪ひたるにも拘らず、尙且つ前年下半期に比し百餘萬圓の增收を見、百萬圓の船價特別償却を行ひ、七十萬圓の配當平均準備金を積立て、普通、優先株に對して年一割五分配當を決行

した、下半期は上半期の半頃發表せし運賃率引上げの外、更に引續き引上げを發表せしのみならず、輸送力も幾分增加し居れることなれば、上半期以上の收益を計上するに至るべく、將來とても戰爭の終熄せざる限り、海運界の不況を來さゞる限り、本社の收益は增加するとも減ずるが如きことはない。この社は曩に地洋丸を喪ひ、一萬噸餘の運送力を減じたれども、六月末サイベリヤ、コレアの二隻を購入したる爲め、今は該船喪失前の輸送力に達して居る、又浦賀船渠に註文せし一萬噸級の貨物船二隻は七年春頃竣成すべく、横濱造船會社にて建造すべき同級船三隻も、其の頃までに竣成する見込である。

◎大阪商船株式會社

大阪市北區富島町六十四番屋敷　決算期六月、十二月

◎設　立　明治十七年五月
◎資　本　金　二千四百七十五萬圓（內拂込二千六十二萬五千圓）
◎株　數　舊株三十三萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株十六萬五千株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　千六百七十六萬八千圓
◎社　債　金　五百五十萬圓
◎配　當　率　年三割
◎後期繰越金　壹百貳十萬三千餘圓（十二月末）

本社五年上半期の利益金は八百四十九萬二千餘圓に上り、前期に比し四百十二萬四千圓、前々期に比し五百五萬四千圓の激增であつた、此の內船舶保險、修繕、減價償却金として二百二十九萬三千餘圓を控除し、六百十九萬九千圓を純益として、此の內更に準備積立三十一萬圓、役員賞與金十六萬圓を引去り、殘額五百七

十二萬九千圓に、前期繰越金四十四萬圓を、加へたる六百十七萬圓を、船價特別償却百五十萬圓、事業擴張資金百萬圓、配當金平均準備金五十萬圓、株主配當百六十七萬六百三十圓（前期に比し六分增しの一割八分）海陸員退職手當資金五十萬圓、海陸員臨時手當金二十萬圓、後期繰越七十九萬九千四百餘圓としたが、下半期は輸送力の增加せし上に、運賃も高率を持續したる結果として、又復た利益金は意外の增加を示し普通臨時合せて三割の配當を決行した。次に本社は過般濠洲定期航路開始の準備として昨十月臨時船を廻航せしめたるに、其成績頗る良好なりしかば、引續き第二船を差立て、最近又南米太西洋岸定期航路開始の目的を以て、其第一船笠戸丸を廻航せしめたるに其成績見るべきあり、此南米太西洋岸定期航路開始に就ては、横濱其他二三商業會議所より其筋へ請願書を提出してある位なれば、其必要にして且つ有望なると同時に、本社かこれより得べき利益の尠からざることは想像するに餘りある。尙ほ本社は最近の總會にて現在資本金二千四百七十五萬圓を五千萬圓に增加することに決定した。

◎横濱船渠株式會社

横濱市入船町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十四年六月
◎資　本　金　三百七十五萬圓（內拂込二百四十七萬五千圓）
◎株　數　七萬五千株（一株額面五十圓內三十三圓拂込）
◎積　立　金　百〇六萬四千七百圓
◎借　入　金　五十五萬圓
◎配　當　率　年一割五分
◎後期繰越金　三萬五千五百餘圓（十一月末）

時局以來各汽船會社は、船舶を極度に使用したる結果として、修繕を要するもの續出し、爲に本社の如きは四年下半期より稍多忙となり、五年上半期に入りては愈よ甚しく、更に下半期は殆どあらん限りの手段と方法とを以て、作業を督勵し進行せしめつゝ、尙依賴者の希望を滿足せしむる得ざる盛況なるが、此の盛況何時まで繼續すべきかは茲に斷言するを得ざれど、假りに時局終結後海運界に不振を來すものとしても、船渠業は依然變らざるものと云ひ得る、何となれば海運界が不振の折こそ却て船舶修繕の好時機と見らるゝからである。去れば本社も茲に鑑みるところありて、現在の最小船渠を二萬噸級の船舶を容れ得る迄に擴張する計畫を立て、近く其實行に着手することに決し、又豫ての計畫たる造船業兼營も機を見て實行すると云ふことである、思ふに本社の此擴張工事の完成する頃には、船舶の入渠を要するもの愈よ增加すべく、殊に本社は郵船會社と特別の關係を有する爲め郵船會社の船舶の修繕は、今後總て本社に於て引受くることゝなるべく、隨つて前途は有望なり。

◎株式會社 新潟鐵工所

新潟市入船町四丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十三年六月十八日
◎資本金　二百萬圓（內拂込百二十萬圓）
◎株　數　四萬株（一株額面五十圓內三十圓拂込）
◎積立金　十二萬三千六百圓
◎配當率　年一割五分
◎後期繰越金　三萬六千五百餘圓（十一月末）

時局の反響として、工作機械類の需要俄に激增し、石油鑿井機類も新設礦業會社の增加に伴ひこれ又需要增加して、五年上半期の收益は著しく增加し、前年下半期に比し三分增しの一割二分配當を爲せしが、下半期は以上の機械類の外、石油發動機の需要增加したる爲め、また又三分增しの一割五分の配當を決行した、尙本社は新潟の工場を初じめ東京其他の工場を擴張して、製造能力を增加する筈なりと云へば、前途尙收益は增加することゝ察せらる。

◎横濱正金銀行

横濱市南仲通り五ノ八三　決算期六月、十二月

◎設　立　明治十三年二月
◎資本金　四千八百萬圓（內拂込三千萬圓）
◎株　數　舊株二十四萬株（一株額面百圓全額拂込濟）新株二十四萬株（二十五圓拂込）
◎積立金　二千八十萬圓
◎配當率　年一割二分
◎後期繰越金　百四十三萬七千圓（六月末）

五年上半期の純益金は、三百六十三萬七千餘圓に上り未だ嘗て見ざる優良の成績であつたが、例により配當は年一割二分として百八十萬圓を支出し、四十萬圓を積立て、殘額を後期繰越としたのである、下半期は外國貿易の盛況に伴ひ爲替の取扱高激增して利益金も上半期以上に達し居れども、配當は無論一割二分に止めて、積立や繰越金を增加することになつて居る。

◎株式會社 日本興業銀行

東京市麹町區錦町一　決算期六月、十二月

◎設　立　明治三十五年三月
◎資　本　金　一千七百五十萬圓（拂込濟）
◎株　數　三十五萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積　立　金　二百十一萬六千八百圓
◎債券發行高　七千七百貳拾七萬圓
◎配　當　率　年六分
◎後期繰越金　六萬圓（十二月末）

五年上半期の利益金は、六十二萬千餘圓にして、殆ど前年下半期に異なる所なく、隨つて之れが處分も略ぼ前年下半期同樣であつたが、下半期は稍上半期よりも收入が增加したれば配當も第一第二を合せて六分に決定したのである。昨年以來本行も總ての點に於て徐々に恢復しつゝあるのみならず、特殊銀行として多大の特典を有することにもあれば、前途は確に樂觀しても宜いと思はれる。

◎北海道炭礦汽船株式會社

東京市日本橋區本革屋町五　決算期六月、十二月

◎設　立　明治二十二年十一月
◎資　本　金　二千七百萬圓（內拂込二千三百四十萬圓）
◎株　數　普通株三十六萬株（一株額面五十圓拂込濟）優先株十八萬株（一株額面五十圓內三十圓拂込）
◎積　立　金　貳百貳萬四千圓
◎社　債　金　六百萬圓
◎配　當　率　普通株年五分、優先株年七分五厘
◎後期繰越金　十四萬九千八十七圓餘（十二月末）

本社は大正二年の大整理以來、鋭意事業の挽回に努めたる功果空しからずして、五年下半期の如きは、普通株の配當を二分增して五分と爲したるが、本期は炭價騰貴の爲に利益增加を齎らしたる上に、本社の分身たる日本製鋼所の增配額丈けにても、七八萬圓に達し居れることなれば、今後は漸次に配當を增すを得べく、尙本社が豫て作業中なりし夕張炭礦の竪坑設備略ぼ完成し、六年の上下兩期に亙りては約百九十萬噸を採掘する豫定なりと云へば、六年以後の利益は著しく增進し、隨つて配當も相當に增加さるゝものと察せらる。

因に同社石炭採掘高近年の增加率は左の如し（單位一萬噸）

大正二年度……一〇五、　同三年度……一三四、　同四年度……一五三、　同五年度……一七〇、
同六年度（推定）一九〇、　同七年度……二〇〇以上

五年度上半期分は八十五萬噸なりしが下半期分は八十八萬七千噸なれば同年度全體にては百七十三萬噸となる勘定なり猶ほ六年度の推定は五年度比較廿萬噸增の計算なり。

いま炭界の前途に就て當業者の說を聞くに炭價は尙ほ一段の高見越なるが如し卽ち左に揭ぐ、

內地諸工業の發展に伴れて需要增加したると、一方運賃及工賃其他一切の生產費暴騰に加ふるに出炭額の遲々として豫定額に至らざる爲め市況益々活況を呈して殆ど止む所を知らざるの好調を持續せる石炭界は越年後稍海上運賃の下落したるにも拘らず炭價は引續き上進の一方にて舊冬豐前田川等塊炭百二十圓見當（東京市場一萬斤に付）なりしものが昨今百三十圓見當に昂進し其他の北海、常磐の何れを問はず凡て相應の高値に產れて前途更に一段の高値を現出す可き模樣なり而して各出炭地に於ける貯炭は十二月

末に於て常磐炭は五六萬噸筑豐炭は廿二萬噸、北海炭十七萬噸と何れも幾分貯炭增加の傾向あるも之れとて運送機關の不備による結果にして今日の市況には何等の痛痒を感せしむるに至らざるのみならず運送能力の不足は各地消費者の在荷數を益々減少し過般來東北及其他地方に於ける大吹雪は同地方消費者をして出廻り薄の爲め一時操業中止を餘儀なくせしむるに至れり從つて其前途の益々好調なる可きは推して知る可く尙彼の印度炭の輸出禁止及鐵道當局の炭價調節の如き平時に於ては必ず强弱何れかの材料となる可き事なるも今日に於ては全く何等の反響もなき程なり

◎九州炭礦汽船株式會社

東京市麹町區有樂町　決算期四月、十月

◎設　立　明治四十年十一月二十六日
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込二百五十萬圓）
◎株　數　十萬株（一株額面五十圓內二十五圓拂込）
◎積　立　金　十萬五千二百餘圓
◎借　入　金　二百十萬九千圓
◎後期繰越金　五萬千五百餘圓（十月末）

五年十月を以て締切りたる營業成績は、一萬九千六百餘圓の缺損となり、前期繰越金七萬千二百餘圓より之れを補塡して、差引五萬千五百餘圓を後期繰越としたが、此缺損は炭價の好況に向ひたるにも拘らず先賣の關係と運賃昂騰の爲に充分の利益を收むるを得ざりしと、又一には從來起業費に計上せし間接費を營業支辨とせしことが原因となつたのである、サレド最早安値先約品の供給を終へ、炭價騰貴の恩惠に浴しつゝあるのみならず、出炭量も多少增加しつゝあれば、今後缺損を繰返すが如きことは萬々あらざるべし。

◎入山採炭株式會社

東京市日本橋區藥研堀町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十八年五月
◎資　本　金　百萬圓（內拂込八十七萬五千圓）
◎株　數　普通株一萬株（一株額面五十圓拂込濟）甲種優先株三千四百株（一株額面五十圓拂込濟）乙種優先株千六百株（一株額面五十圓拂込濟）新株五千株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　百五十八萬一千圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　十萬六千百餘圓（十一月末）

本社過去數期間の成績は、本邦石炭會社中の第一位を占め、特に五年上半期の如きは拂込資本金に對して約九割に相當する四十萬七百餘圓の利益を計上し、內二十二萬圓を積立及財產償却に充當したる程なりしが、下半期は年額二十五萬噸の出炭力ありたる第三號坑廢坑の爲に利益金は稍減じて、從來の如き第一位の成績を示す能はざるやうなれど、配當は前期同樣年二割に決定したれば、株主としては何等の不利なく、又第三號坑の代りとして開鑿中の第五號坑は最初の豫定以上に工事進捗して、六年下半期には採炭し得る見込なりと云へば、同期以降再び第一位の成績を示すことゝ思はれる。

◎東京建物株式會社

東京市日本橋區吳服町　決算期六月、十二月

◎設　立　明治二十九年十月
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込三百八十萬圓）
◎株　數　舊株二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株八萬株（三十五圓拂込）
◎積　立　金　五十二萬九千五百圓
◎配　當　率　年九分
◎後期繰越金　一萬二千六百餘圓（十二月末）

本社は五年の下半期に於て二十餘萬圓の純益を收めたれば、例により年九分の配當を爲したるが、その純益金額は別段前期よりも增加せざりし爲め、世には本社の事業を既に行き詰れるものゝ如く吹聽するものあれど元來本社の事業は、景氣の恢復が一般に行き亙りたる後に於て初めて繁昌すべきものなれば、過去の成績の昂進せざりしとて前途を悲觀するに當らざるべく、現に景氣の好調に伴ひ擴張を畫しつゝある位なれば、今後に於て發展すべきものと見らる。

◎石狩石炭株式會社

東京市日本橋區本革屋町　決算期六月、十二月

◎設　立　明治三十九年四月
◎資　本　金　三百七十五萬圓（內拂込三百萬圓）
◎株　數　七萬五千株（一株額面五十圓內四十圓拂込）
◎積　立　金　二十四萬六千圓
◎後期繰越金　二百餘圓（六月末）

本社は五年二月前社長淺野總一郎氏の手を離れて三井系の經營に移り、爾來新理事者は各方面に亘りて改革を斷行し、頻りに事業の挽回に努めつゝありしも、如何せん鑛夫の補充困難にして、豫期の採掘を爲すを得ず、加ふるに海上運賃の昂騰せし爲に、同期は却て二萬九千四百餘圓の缺損となり、別途積立金より之れを補充して、二百餘圓を後期繰越と爲せし次第なるが、下半期は鑛夫の補充稍意の如くなりし上に、運賃其他に就ても機宜の方法を取り居れる模樣なれば、相當の利益を計上し得べく、場合によれば從前の五分配當を復活することゝならんか。

◎東京瓦斯株式會社

東京市神田區錦町三丁目　決算期六月、十二月

◎設　立　明治十八年十月
◎資　本　金　四千五百萬圓（內拂込三千八百萬圓）
◎株　數　舊株三十四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株五十六萬株（三十七圓五十錢拂込）
◎積　立　金　二百三十三萬貳千貳百餘圓
◎借　入　金　五百五十五萬圓
◎配　當　率　年八分（十二月末）

本社五年上半期の利益金は百六十五萬九千九百餘圓に達し、前年下半期に比し約十萬圓、前年同期に比すれば二十七萬二千餘圓の增加にして、優に配當を增す餘地ありたれども、依然年七分配當に止めて財產償却を增し、一方時局の爲め金屬類騰貴の結果不用鐵管其他の金屬類を賣却して、約百萬圓を得それだけ借入金を

償却して、内容外觀共に社運の挽回を實にせしが、其後一般景氣の高潮と共に瓦斯の需要は彌よ增加し、殊に燈火用炊事用としてよりも工業用動力、鑄金及び燒入れ用其他種々の方面に擴張せられつゝありて、最早瓦斯は燈火用炊事用時代より工業用時代に移りたるかの如き觀あり、而して五年下半季の成績は副生物收入等前期と大差無けれども三井鑛山部に夕張炭鑛を有利に賣却せると貯藏物品の賣却並に興業費の削減等の爲めに貸借關係は著しく變じ之を前期に比較するに興業費は百六十一萬八千十一圓を減じ貯藏物品は五十二萬八千三百十七圓を減じ借入金消却の結果百六十萬圓を減じて一方當座預金は七十六萬一千五百五圓受取手形は七十五萬四千四十八圓を增加したるを以て借入金殘額は受取手形と銀行預金とにて相殺せらるゝの計算となれり。而して本期の利益金は前年同期に比して三十一萬二千六百九十五圓を增す計算となれり。

◎東京電燈株式會社

東京市麹町區有樂町三丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十年十一月
◎資　本　金　五千萬圓（內拂込四千七百四十萬圓）
◎株　數　舊株四十八萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株五十二萬株（四十五圓拂込）
◎積　立　金　二百一萬八千六百圓
◎社　債　金　五百萬圓
◎配　當　率　年八分
◎後期繰越金　百四十二萬五千七百圓（十一月末）

電燈電力の需要は一般の景氣回復、事業界の活躍に伴ひ逐日增加し、一方三電協定成立後の料金整理の進行

と相待ちて、營業收益は著しく增加して、五年上半期の如きは前年下半期に比し實に四十四萬餘圓の增收に達したるが下半期は點燈時の短き夏季を含む爲め從來收入を減ずる例なるも、又一には諸設備改良に尠からざる資金を投じたる爲め結局上半期よりも約二十五萬圓の減收となれり、然れどもこの減收の原因が右の如き次第なれば、其前途は決して悲觀するに足らぬのである。而して本社は猪苗代水電よりの給電增加に伴ふ受電設備に今後尙一千萬圓を要する外、信濃川流域に於て新たに十萬基以上の水力發電計畫を立て、關係官廳に出願中なれば新株未拂込殘額を拂込ましめたる後、或る程度の增資を行ふことであらう。

◎日本電燈株式會社

東京市本所區藤代町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十四年十二月
◎資　本　金　千二百萬圓（內拂込六百萬圓）
◎株　數　二十四萬株（一株額面五十圓內二十五圓拂込）
◎積　立　金　四萬九千五百圓
◎配　當　率　年四分五厘
◎後期繰越金　一萬四千八十圓（十一月末）

料金、不拂兩協定の成立以來本社の成績は漸次面目を改めつゝあるを見る、卽ち二分四厘配當より三分六厘配當となり、五年下半期は更に九厘增の四分五厘配當を決行し得る迄に至つたのである、斯くて、今や五萬燈の供給狀態は整理の結果極めて堅實な需要者のみとなつたのであるから、今後は益す利益金の增加すべきは勿論で、殊に市電側の電燈解決案にして決定する場合には今日以上の好成績を收め得る見込があるから、

本社は今後が最も有望であると云はねばならぬ、次に現在の未拂込は當分其の儘にして置くと云ふ事であるけれども、供給燈數の増加するに從ひ、更に諸設備を擴張すべき必要あるのみならず、株主側よりは此際拂込を徴收して、事業を擴張しては如何との申込もあれば、東京市の電燈問題解決次第にて或は拂込を徴收して事業を擴張することゝなるかも知れない。

◎利根發電株式會社

前橋市堀川町　決算期三月、九月

◎設　立　明治四十三年五月
◎資　本　金　六百十萬圓（内拂込四百七十二萬七千圓）
◎株　數　壱株四萬四千七百株（一株額面五十圓拂込濟）新株七萬七千三百株
◎積　立　金　十一萬四千三百圓
◎借　入　金　三百五十萬圓
◎配　當　率　年七分
◎後期繰越金　六萬四千七百餘圓（九月末）

五年上半期即ち九月締切りの營業純益二十四萬八千四百餘圓に上り、前年下半期に比すれば九萬八千六百餘圓の増收にして、此の期は資本金拂込額に於て五十七萬圓の増加なりしも前期に比し一分増しの七分配當を爲し、約五萬圓を後期繰越とする好成績であつた、然かも此の期に於て増加せし電燈電力の供給は多く營業期の中間より開始したるものにして、一期を通じての收入にあらざると、又一には未消化電力の新規供給開始見込のもの尠からざるにより、六年上半期は更に相當の増收に達すると云ふことである。

◎鬼怒川水力電氣株式會社

東京市麹町區有樂町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十三年十月
◎資　本　金　千三百五十萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　二十七萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積　立　金　三十一萬五千三百圓
◎社　債　六百萬圓
◎配　當　率　年五分
◎後期繰越金　七千三百九十圓（十一月末）

新事業の隆起に伴ひ電力の需要は益す増加の一方である、去れば本社の供給率も漸次増加して五年下半期一日平均供給量は二十六萬八千五百七十五基に達し、前期よりは三萬キロ以上を増して居る、本社の最高能力五萬馬力の全部を供給し得るの日も眼前に迫つて居ると云つても宜い、斯の如く社業の順潮に赴きたる以上は五百六十五萬圓の社債も、當事者が計畫せる如く十年間に於て全部償却し得るは云ふ迄もなく、旁々五分配當も確實なりと云はねばならぬ、殊に先頃高利なる社債を七朱に借替へた結果支出に於て尠からざる金額を節約し得るの一事は本社の大成功である。

◎猪苗代水力電氣株式會社

東京市麹町區有樂町　決算期三月、九月

◎設　立　明治四十四年十月
◎資　本　金　二千萬圓（内拂込九百四十五萬圓）
◎株　數　四十二萬株（一株額面五十圓内二十二圓五十錢拂込）

◎積　立　金　五萬四千圓
◎借　入　金　三百九十萬圓

本社の電力供給量は、各種製造工業の殷賑に伴れて五年上半期に於て著しく増加した、卽ち東京方面にては既定の東京電燈への供給を初め其他の各社へ、又發電所方面にては化學工業其他の大工場へ夥からざる數量を供給したのである、爲めに同期の收益は前年下半期よりも約十萬圓増加して、優に一割の配當を爲し得る好成績であつたが、本社當事者は突飛なる増配を避けて、前年下半期よりも五厘増しの六分配當として、積立金及繰越金を増したのである。次に本社の速成計畫たる一萬馬力増電工事は九月中にて竣成を告げ、十月より運轉を開始した、コレが爲め本社は六年上半期に夥からざる收入を増すのである、尙本社は既定の第二工事にも著手して、大正七年までに完成せしむる豫定になつて居る、此等の資金として株主側より拂込徵收の要求もあつたが、竟に六年四月迄に年六分利の社債八百萬圓を募集することに決定した。

◎桂川電力株式會社

東京市銀座三丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十三年九月二十日
◎資　本　金　八百萬圓（內拂込五百六十萬圓）
◎株　數　十六萬株（一株額面五十圓內三十五圓拂込）
◎積　立　金　二十一萬二千圓
◎配　當　率　年一割
◎後期繰越金　十萬七千五百餘圓（十一月末）
◎配　當　率　年六分
◎後期繰越金　三萬二千六百圓（九月末）

本社は五年上半期に於て、第一期工事、發電量全部を賣盡し三十六萬八百餘圓の利益金を收め、年一割の配當を爲し三萬七千圓を積立て其殘額を前期繰越金に加へて七萬九百餘圓を下半期へ繰越したのであるが、下半期は又復た三萬五六千圓の利益増加を見たのである、但し本社は既に發電量全部を賣盡し居れば、此の上の利益増加は現に工事中の五千馬力増電計畫の竣成後と見なければならぬ、而して其竣成期は六年六月てふ豫定なれば、同年下半期には相當に利益金が増加することゝ思はれる。

◎横濱倉庫株式會社

横濱市千若町一丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治三十九年九月
◎資　本　金　三百八十萬圓（內拂込百七十四萬八千圓）
◎株　數　七萬六千株（一株額面五十圓內二十三圓拂込）
◎積　立　金　五千八百圓
◎配　當　率　年四分
◎後期繰越金　一千百餘圓（十一月末）

五年上半期二分配當を爲し得たるに過ぎざるも、下半期は商業界の殷賑に伴ひ貨物の集散著るしかりし結果創立以來空前の收入を獲得したのである、されど六萬坪てふ大空地に資金を固定せしめ居る爲め配當は四分に止めたのである、尤も近く櫻麥酒へ二萬四五千坪を賣却する筈で、尙ほ其他にも賣買談進行中であるから此の大空地の處分にして全部解決せば本社も始めて蘇生し得る譯である。尙ほ横濱より鶴見に至る鐵道院の貨物線完成の曉は同埋立地は一層の利便を増すべき筈である。

◎王子製紙株式會社

東京府北豐島郡王子町　決算期五月。十一月

◎設　立　明治六年二月
◎資　本　金　千二百萬圓（內拂込九百萬圓）
◎株　數　舊株十二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株十二萬株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　百九十一萬圓
◎社債借入金　六百四十八萬圓
◎配　當　率　年一割八分
◎後期繰越金　二十二萬九千圓（十一月末）

本社の營業成績は、五年上下兩期を通じて同業會社中最優良のものであつた、之れは云ふ迄もなく原料を自給し尙剩餘を他に供給するに至りたる爲、洋紙の利益が他より大なる上に原料の利益も相當に計上するを得た結果である、而して本社は今後も洋紙と原料事業とを併立せしむる目的を以て、曩に樺太に年產一萬五千噸の能力ある第二原料工場を建設し、他方北海道苫小牧の製紙場を初め遠州中部並に王子本社の製紙能力を約三割方增加すべき工事中なりしが、昨今其工事も略ぼ完成したる模樣なれば、六年以後の收益は驚くべき巨額に達することゝ察せられる。

製紙界の將來に就て藤原專務の談は左の如く大體樂觀である

▲生產上の强み　本年の製紙界は如何なる景況を呈すべきや時局の推移未だ測る可らざる今日に於て之れが的確なる觀測を下すことは到底困難と爲さゞるを得ず然れども大體の傾向を論ずるに於ては大正六

年の我製紙界は時局の繼續すると否とに拘はらず相當の好況を持續するものと推斷せざるを得ず卽ち時局の繼續するに於ては益々市價の昂騰を促す可きは自明の事實なれば暫く論外に置き扨て時局が目下の狀態より漸次平和の克復に向ひて進むにせよ或は五六月の交か將た秋季に於てか一大決戰を經て平和に復するにせよ歐洲交戰國が直に戰前の如き狀態に於て生產を開始し商業を營み得るや現在の「紙の饑饉」なる狀態を恢復するが如きは到底難事と想像せざるを得ず一方我國の狀況如何と云ふに時局中に於ける製紙技術の進步は著しきものあるの一方、原料パルプは目下進行中の各工場設備の完成を待ちて六月以降に於ては化學的パルプのみにても年產額五萬數千噸に達す可きを以て內國の需要を充分に滿たしたる上に更に多少の餘力を示すに至る可し之れ此產業上に强き基礎を爲せるものなるが又需要の方面を見るに外國市場は尙ほ製品の不足ある可き一方、內國に於ては一般の富力增進の事實は製紙の需要は增加するとも減少を來たすが如き事萬無かる可く從つて價格も甚しき崩落を演ずるが如き事は想像す可からず

▲懸念す可き一事　右の如く予は大體に於て當年の斯業を樂觀するものなれども唯一事の懸念す可きものあり卽ち舊ち舊臘獨逸媾和提議の情報到るや株式市場は暴落を重ねて慘憺たる光景を演出したるが此原因は勿論一定の在り得可き事實に基礎を有するものもある可きも併も尙ほ全く一種の心理的原因に支配せられたることも亦掩ふ可からず左れば將來媾和愈々成立するに至らば彼の株式市場の經驗せる心理的恐慌の狀況は商品市場の上に現はるゝやも測る可らず之れ予の懸念する所にして若し製紙市場が斯の如き狀態に陷る時は相場も相當に低落す可く一時混亂を免れざる可きも然も乎は單に一時的の激動にして事

實上の理由なき心理的激動なるが故に少時にして適當なる狀態に恢復す可きは明瞭にして且つ會社としては既に好況時代を經て何れも其基礎を鞏固にせるを以て斯の如き一時的の激動に處するには何等懸念を要せざる可し云々

◎東京板紙株式會社

東京府北豐島郡南千住町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治十九年十月
◎資　本　金　百五十萬圓（內拂込百萬圓）
◎株　數　舊株一萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二萬株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　三十三萬六千九百圓
◎借　入　金　二十五萬圓
◎配　當　率　年一割六分
◎後期繰越金　四萬九百餘圓（十一月末）

本社は四年末に於て洋紙製造能力を擴大したる結果、五年上半期には、四年下半期に比し一躍四倍餘の利益金を收め、五分增しの一割四分配當を決行したのであるが、下半期は洋紙市價稍低落せし爲め多少利益減を免れざるやに見えしも、製造高は上半期以上に達し、市價低落の不利は製造高增加によりて打消されて、更に上半期に優る好成績を擧げたるのみならず今後と雖ども一般の景氣に變調を來さゞる限り、五年下半期並の成績を擧げ得る見込なりと云へば、本社の前途は實に有望なりと云はざるべからず。因みに五年下半期の利益金は二十七萬八千六百餘圓に達したるを以て、前期に比し二分增しの一割六分の配當を決行したのである。

◎富士製紙株式會社

東京市京橋區三十間堀一丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十三年一月
◎資　本　金　一千萬圓（內拂込八百二十七萬圓）
◎株　數　舊株五萬四千株（一株額面五十圓株込濟）新株十四萬六千株（四十五圓拂込）
◎積　立　金　百七十萬六千六百圓
◎社債借入金　五百二十六萬三千圓
◎配　當　率　年一割七分
◎後期繰越金　十二萬四千六百餘圓（十一月末）

本社が四年下半期に於て、利益金の內三十二萬五千圓を機械建物其他の償却に充當し、從來の年九分配當を一割に進めたるを以て、世人は驚くべき好成績としたのであつたが、五年上半期には、又復た償却金を五十二萬五千圓に增加し、株主配當を年一割四分に進めて、世人をして殆ど驚嘆の辭なからしめたのである、然かも本社は之れを以て足れりとせず、益事業の擴張に努めたる結果下半期は一層收益增加して償却も配當も共に相當の增加を爲し、尙進んで現在資本金一千萬圓を倍額の二千萬圓と爲し、更に事業を擴張せん計畫を立てたるなれば、今後本社の收益は益々增加するであらう。

◎東洋紡績株式會社

三重縣四日市市大字濱町　決算期五月、十一月

◎設　立　大正三年
◎資　本　金　二千五百萬圓（內拂込千七百四十五萬二千五百圓）
◎株　數　舊株二十八萬五千株（一株額面五

十圓拂込濟）新株二十一萬五千株
十五圓拂込）

◎積　立　金　千十萬圓

◎社　債　金　二百萬圓
◎配　當　率　年二割五分
◎後期繰越金二百四十九萬八千圓（十一月末）

本社は五年九月一日を以て、資本金千四百二十五萬圓、二十八萬五千株を増し、現在の二千五百萬圓五十萬株としたのであるが、此の新株の内十萬千株を額面以上にて公募に付し、約百萬圓のプレミアムを得たることは、本社の信用程度を物語れるものとして、今猶人の記憶に存する所である。營業の狀況は、日を經るに隨ふて盛大に趣き、五年上半期には前年下半期に比し四分増しの二割配當をしたのであるが、下半期は又復た利益増加した爲めに二割五分配當を決行した。近く支那に紡績工場を建設し、其他内地の各工場をも擴張すべく夫々準備中なれば、今後益々利益が増加することゝ思はれる。

◎尼崎紡績株式會社

兵庫縣尼崎市　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十二年六月
◎資　本　金　七百五十四萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　三十萬千六百株（一株額面二十五圓拂込濟）

◎積　立　金　三百五十萬圓
◎配　當　率　年四割
◎後期繰越金　百五十八萬七千百餘圓（十一月末）

紡績會社の營業方法を大別して二とすることが出來る、其一は原棉の買入と同時に綿絲の先約をするのである、其二は苟も綿絲の相場が思ふやうに昂らぬ時は、之れが賣約を見合せ、昂騰した時に初めて賣放つのである、第二の方法は多額の資金を要し且危險の伴ふ代りに利益が多いのである、本社が多年三割の配當を爲し五年上半期より更に一割を増し四割と爲したのも、此の第二の方法を採用せる爲にして、今後と雖も經營者が熟練家揃ひである丈けに危險の慢なく、唯利益が益々増加するのみと想像される、要するに本社の如きは紡績界の第一流會社である。

◎富士瓦斯紡績株式會社

東京府南葛飾郡大島町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治三十九年
◎資　本　金　一千八百萬圓（内拂込一千三百萬圓）
◎株　數　舊株十六萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二十萬株（二十五圓拂込）

◎積　立　金　三百九十五萬三千四百圓
◎社債借入金　五百十二萬千圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　二百十四萬六千九百圓（十一月末）

本社の營業利益金は、四年下半期の二百萬二千六百餘圓が、五年上半期には二百四十六萬八千六百餘圓となり、同下半期には更に二百七十八萬四千五百餘圓に増進し、之れと同時に株主配當も四年下半期の年一割二分が、五年上半期には一割六分、同下半期には二割に増加されたのである、而して此利益金の増進原因如何と云へば、戰時の影響もあらうし、米棉高に伴ふ綿絲騰貴の偶然の結果も又あらうが、實際は其事業の自然

的發達に歸するのである、卽ち發達すべき運命の下にありたる事業が發達して利益金が增加したのである、然かも本社の事業は今後尙發達すべき多くの餘地を存するのみならず、最近或程度の增錘か又は既設會社を合併して事業を擴張せんとしつゝあれば、漸進愈進何れにもせよ、今後引續き利益金の增加するものと見なければならぬ。

◎鐘淵紡績株式會社

本店 東京府南葛飾郡隅田村
支店 神戸市東尻池　決算期六月、十二月

◎設　立　明治二十五年五月
◎資　本　金　千七百四十二萬七千六百五十圓（內拂込千四百九十六萬六千六百三十圓）
◎株　數　舊株十八萬四千四百八十五株（一株額面五十圓拂込濟）新株十六萬四千六十八株（三十五圓拂込）
◎積　立　七百九十三萬八千二百圓
◎社　債　金　四百二十五萬圓
◎配　當　率　年三割
◎後期繰越金　二百九十七萬七千八百餘圓（十二月末）

本社は五年上半期に於て大正元年下半期以來繼續せし年一割六分配當を二割に增し、更に下半期は三割に增進した、此の一事以て如何に本社の營業が隆盛に趣きつゝあるかを知るに足ると同時に、一旦三割配當を決行する以上當分之れを以て普通程度と爲す方針なることも窺はれる、而已ならず本社が紡績業は紡織より更に密に入り、酒し及び染織に進展すべきものなりてふ信條の下に、英國より技師を聘して酒し及び染織を兼

營すべき準備中なるが如き、前途一層利益增加を豫想するを得べければ、三割配當は近く四割に增加せられぬにも限らぬのである、因みに本社は六年六月二十六日を以て新株一株に付五圓宛拂込を徵收することに決定して居る。武藤專務の語るところに據れば

大戰の終熄は世界の產業界に一大變革を與ふべし交戰國の事業界も中立國の其れも皆漸變若くは急革を免るべきに非ず但し本邦の紡績界は戰時中收益を激增して會社の基礎愈々固きを加へつゝ有れば急劇なる惡影響を蒙るべしとも考へられず而して大戰の繼續は本年中は先づ疑もなきが如し鐘淵紡績會社としては樂觀に偏せず悲觀に陷らず能く世界の大勢に順應して業務の發展を期するの一面又愼重事に當り極めて堅實に今後に處する所あらん事を欲す大勢にして激變を來さざる限り次期卽ち大正六年度上半期に於ても本期同樣普通特別臨時の三種配當を合せ年三割の配當を爲し得べき確信は今に於て確かに之あるを斷言する者なり

◎日清紡績株式會社

東京府南葛飾郡亀戸町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十年一月
◎資　本　金　一千萬圓（內拂込四百萬圓）
◎株　數　二十萬株（一株額面五十圓內二十圓拂込）
◎積　立　金　三十萬七百圓
◎配　當　率　年一割六分
◎後期繰越金　七萬五千餘圓（十一月末）

五年後期の利益金は六十萬千餘圓即ち前期よりは十八萬圓以上の增加を收め得て、一割二分の普通配當と四分の特別配當を爲し、次期に六萬四千圓を繰越すに至つたのである、尙ほ目下增設中なる第二工場を完成するには更に資金の必要を感じつゝあれば、現在の未拂込金一株三十圓中より二十圓丈けを六年上半期中に拂込む事になつて居る、而して若し第二工場完成の曉には製造能力現在の四萬錘は一躍六萬七千五百錘となる筈で、而かも一錘當りは僅々五十圓に過ぎずして比較的低價となるのであるから、前途は實に有望なりと云はなければならぬ。

◎東京キヤリコ製織株式會社

東京府南葛飾郡吾嬬町龜戸　決算期五月、十一月

◎設立　明治三十九年九月
◎資本金　五百萬圓（內拂込二百七十五萬圓）
◎株數　舊株四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株六萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　二十萬九千三百圓
◎配當率　年一割二分
◎後期繰越金　三萬百九十圓（十一月末）

四年夏頃より織布の輸出が增加した爲に、久しく悲境に沈淪しつゝあつた本社は、漸く恢復の氣運に際會し、同年下半期には兎も角も八分の配當をしたが、五年上半期に入るや內外各所より註文殺到して、到底應じ切れざる爲に、二百萬圓の資本金を五百萬圓に增加して、織布設備を擴張し且原料紡績部を新設することゝし、直ちに其工事に着手して最早完成に近づきつゝあれば、六年上半期より相當に收益を增すことゝ思はる。

◎東京製絨株式會社

東京府北豐島郡王子町　決算期六月、十二月

◎設立　明治二十八年八月
◎資本金　二百萬圓（內拂込百二十五萬圓）
◎株數　舊株二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　七十七萬五千二百圓
◎借入金　四十一萬二千九百圓
◎配當率　年一割二分
◎後期繰越金　二十八萬七千餘圓（十二月末）

本社は時局以來露國の軍絨註文を引受け、尠からざる利益を收めたが五年下半期に入りて該註文の一段落を告ぐると共に、事業漸く閑に利益も亦減却すべき形勢となつた、然るに茲に東洋毛織會社との間に合併契約を爲したる東京毛織物會社は、更に本社に向つて合併談を持込みたるを好機とし、本社は合併前に於て倍額の增資を爲す條件の下に之れに應じ、六年二月末日を以て合併する筈である、而して下半期の配當は、東京毛織物と協議の上、上半期同樣年一割二分に決定した、併し成績は存外良好であつたから三十萬圓近くの繰越金を得た。

◎東洋毛織株式會社

東京府荏原郡大井町　決算期三月、九月

◎設立　明治四十四年四月
◎資本金　三百萬圓（全額拂込濟）
◎株數　六萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積立金　十萬七千三百圓
◎借入金　百六十萬圓
◎配當率　年一割二分

本社は曩に理事者の交迭と同時に大整理を爲し、其後稍面目一新の觀なきに非ざりしも、他の同業會社に比すれば、猶成績不良を免れず、且運轉資金乏しき爲に、豫期の如く事業を進行せしむるを得ざる狀態であつた、東京毛織物會社は即ち此狀態を看破し合併を慫慂し、遂に本社は五十圓拂込株を四十圓に切下げ、六年二月末日を以て合併すべき契約を締結し、既に双方とも總會の決議を經たのである。

◎東京毛織物株式會社

東京府北豐島郡南千住町大字地方橋場　決算期　六月、十二月

◎設　立　明治三十九年十一月
◎資本金　二百萬圓(全額拂込濟)
◎株　數　四萬株(一株額面五十圓拂込濟)
◎積立金　六萬五千圓
◎配當率　年一割二分
◎後期繰越金　三十七萬三千三百餘圓(十二月末)
◎後期繰越金　七萬四千餘圓(九月末)

關東の毛織業を打つて一團と爲すべき大計畫は、屢試みられて其都度失敗に終つたのであつたが、本社は今回夫れに成功して、近く東京製絨と東洋毛織とが各分工場として經營するのである、合併の條件は東京製絨並に東洋毛織の麾下に記述した通りであつて、愈よ合併完了の上は、本社の總資本額一千百萬圓、此數二十二萬株、内全額拂込濟みのもの八萬株、四十圓拂込のもの六萬株、十二圓五十錢拂込のもの八萬株となるのである。會社當事者の談に據ると露國の再註文を見すとも、内地向き若しくは輸出取引に一歩を進むるを得たるを以て、次期の商況に就ては少しも懸念するところがないとのことである、加之羊毛及び染料とも多額

の貯藏あれば世間で思ふ程に製作上には些の不便を感じぬとのことである。

合同後の見込に就き東洋毛織の專務藤田謙一氏の意見を聞くに

關東三毛織會社の合同は(一)原料の買入並に製品の販賣に就き從來の如き不利益なる競爭を防止するを得べく(二)各社各別に諸種の工程を續くるの要なく割據分立に伴ふ重複の生産組織を改變し得べき結果として合同後の毛織會社は合同前の分立當時と比し約三割方の生産增加を期待し得べし而して(三)營業費事務員等の減額すべきは合同當然の結果にして此以外にも擧げ來れば合同に依る小利小益は頗る多し而も合同に依る事業上の弊害なるものは未だ曾て一として之あらざるを見る也事熟此の如きに加へて三會社は何れも相應に多額の繰越金を有する事なれば合同後二三期間は此繰越金のみにても優に年一割二分の配當を爲し得べき筋合にて關東三毛織合併の前途眞に洋々たる春海の如きものあり去れば合同前の新株拂込が夫れ丈け當然統一後の會社の配當負擔を增加する道理なるに拘はらず會社前途の基礎の堅固にして有利なる前掲の事情を見れば亦何等新株增加の將來を悲觀するの要なきを知らん以上は露國軍絨註文最早到來せざるものとしての見込なるが新年に入り新に彼我の間新藏券發行の交渉進行中の模樣にて第三次藏券の發行せらるゝ場合こそ更に毛織業を一層有望有利ならしむべし

◎東京モスリン紡織株式會社

東京府南葛飾郡吾嬬村大字請地　決算期　五月、十一月

◎設　立　明治二十九年二月
◎資本金　四百萬圓(内拂込百五十萬圓)

◎株　　數　舊株四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株四萬株（十二圓五十錢拂込）

◎積　立　金　九十六萬一千二百圓
◎配　當　率　年二割四分
◎後期繰越金　二十四萬六千餘圓（十一月末）

時局以來モスリン原料の輸入著しく不圓滑となり、原料自給設備を有せざる會社は殆ど休業同樣の生産制限を爲したるにも拘はらず、本社は幸ひに或程度の原料自給設備を有せし爲に、モスリンの市價騰貴と相俟つて多大の利益を收めたのである、然るに其後更に原料製造設備を擴張して、モスリンと原料製造とを併せ營む計畫が立て、一面其工事に着手すると同時に他面資本金を倍額の四百萬圓に增加して、運轉資金を裕にしたのであるから、今後は必ずや之れに相當する利益を擧げることゝ察せられる、因みに本社のモスリン原料製造設備は、六年上半期より、月産能力十萬封度が增し、總計三十萬封度となる筈である。

◎東洋モスリン株式會社

東京府南葛飾郡龜戸町　決算期五月、十一月

◎設　　立　明治四十一年一月
◎資　本　金　四百萬圓（內拂込二百五十萬圓）
◎株　　數　舊株四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株四萬株（十二圓五十錢拂込）

◎積　立　金　六十一萬一千五百圓
◎配　當　率　年一割五分强
◎後期繰越金　四萬五千三百圓（十一月末）

本社が時局の突發により羊毛の輸入大激減を來たし、各社共五割以上の操業短縮を餘儀なくせられたる當時

綿繻子、カナキンの製織業を計畫せるが、其後事業は著々として好結果を齎らし、五年上半期既に擴張の止むなき程の盛況を示し、二百萬圓の資本を倍額の四百萬圓に改めたのである　斯くて六年四五月に至れば四百八十臺の織機と一萬七千錘の紡績機とが据付けられて盛んに綿繻子、カナキン等を製織するのであるから、本業たるモスリンの好景氣と相俟つて爾後愈々益す發展すべき運命を有つて居る、尙ほ本社の財産狀態は近來著しく面目を改め五十萬圓の借入金は全部消却し、配當準備の積立金を爲す事とした。五年後季の配當も重役は前期通り一割三分を主張したが、次期の見込が確實と云ふので遂に二分增しに決定したのである。

◎上毛モスリン株式會社

群馬縣邑樂郡館林町　決算期六月、十二月

◎設　　立　明治三十五年四月
◎資　本　金　四百萬圓（內拂込二百八十萬圓）
◎株　　數　舊株二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株六萬株（三十圓拂込）

◎積　立　金　十六萬二千圓
◎社　債　金　十九萬五千圓
◎配　當　率　年八分
◎後期繰越金　一萬千五百餘圓（十二月末）

本社現在の拂込資本金は二百八十萬圓にして、固定資本金は岐阜工場二百七萬圓、館林工場百三十五萬圓に計上され、從來六十五萬圓以上は拂込額より超過して居たのである、然るに事業意の如く發展せず內紛頻りに起り頗る非況に陷つて居たが、今回岐阜工場を日本毛絲會社へ三百四十萬圓で賣却した結果此れが現金の處分に就いて目下研究中であるが、一部の株主は拂込金全部の償還を望み又た一部の株主は新事業の計畫を

主張しつゝある。而して如何なる結果を告ぐるや不明なれど拂込金の半額位は多分償還することゝならう、兎に角二百七萬圓の工場が三百四十萬圓に賣れたと云ふ事は本社に取つて喜ぶべき事である、因みに五年下半期は、岐阜工場を賣却したにも拘らず、綿林工場丈けで、上半期に優る利益を收めたるにより、八分の配當を決行し尙ほ繰越金をも增加した。

◎日本鋼管株式會社

神奈川縣川崎庄若尾新田　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十四年五月
◎資本金　五百萬圓（內拂込二百七十五萬圓）
◎株數　舊株二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株六萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　百六十七萬五千圓
◎借入金　百九十五萬千圓
◎配當率　年二割
◎後期繰越金　七萬四千八百圓（十一月末）

本社の製品たる引拔鋼管に本邦製品中獨得の優良品として市場を風靡しつゝありしが、時局の突發と共に內外各所の註文激增し、五年上半期の如きは、拂込資本に對して實に九割に相當する百八萬千圓の大利益を收めて二割の配當を爲したのであるが、之れより先き現在の五百萬圓に增資し、且つ工場を增設する事とし、六年二月迄に全部竣工する豫定なるのみならず、本社の專務たる今泉博士が海外出張の折瑞西にて買入を約束したる原鐵製造機械の到着する場合には再度の增資を爲し聆くとも千萬圓以上の大會社と爲し製鐵界に

雄飛する計畫もあれば同株の將來は頗る有望なりと云はねばならぬ。

◎大日本麥酒株式會社

東京府荏原郡目黑村事務所　東京市京橋區竹川町　決算期六月、十二月

◎設　立　明治三十九年三月
◎資本金　千二百萬圓（內拂込七百五十二萬圓）
◎株數　舊株十一萬二千株（一株額面五十圓拂込濟）新株十二萬八千株（十五圓拂込）
◎積立金　二百十五萬圓
◎配當率　年二割
◎後期繰越金　五十萬九千圓（十二月末）

內地に於ける麥酒の需要は景氣恢復に伴れて漸次增加しつゝある上に、時局の影響にて海外輸出が頓に增加した爲に、本社の收益は最近數期間增加一方であつて、二年下半期より四年上半期まで繼續した一割四分配當を、同下半期には一割五分に、更に五年上半期には一割六分に增加したのであるが、其後に於ける需要は依然旺盛を極めつゝあるのみならず、六年上半期より新たに青島工場の釀造酒を賣出すことにもあれば、收益は愈よ增加すべく、隨つて配當も尙大いに增加さるべきものと見て差支ない、因みに戰亂終熄後も、今日の如き輸出を持續し得るや否やに就き聞く處に據れば、假りに戰亂終熄と同時に歐洲品が南洋諸島及び東洋方面に入り込むものとしても、價格の點に於て充分競爭し得る餘地ある爲め、今日以上の輸出を見るとも減する樣な惧はないさうである。

◎麒麟麥酒株式會社

横濱市山手町一二三　決算期六月十二月

◎設　立　明治四十年二月
◎資　本　金　二百五十萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　五萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積　立　金　十三萬餘圓
◎配　當　率　年一割
◎後期繰越金　三十二萬三千圓（十二月末）

當社の製品の販路は他の容易に侵入するを得ざるものあり、爲に本社も進んで他の販路を侵す必要もなく、極めて安全に事業を經營して來たのである、去れど本社の資本金は既に全額拂込濟なるのみならず、又造石高も現在以上に增加するを得ざる模樣なれば、此儘尙多額の利益增加を齎らすものとは思はれない、尤も資本を倍額に增加して設備を擴張する計畫も熟したりとのことなれば夫れ相當の利益を擧げ得られるであらう。

◎東京製綱株式會社

東京市京橋區三十間堀町一　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十八年四月
◎資　本　金　三百萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　舊株三萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株三萬株（同上）
◎積　立　金　百七十二萬五千五百圓
◎配　當　率　年一割六分
◎後期繰越金　十七萬一千九百圓（十一月末）

製綱事業は個人又は小資本の會社組織のもの尠からざれども、之れ等は大量の製造を爲すを得ざる上に、設

備の不完全なる爲め製品も比較的不良を免れないのである、然るに當社は資本も相當に有し設備も之れに伴ふものある爲め、大量の註文は殆ど當社の獨占する所となり隨つて利益も多く毎期一割四分乃至六分の配當を續けて來たのである、然るに製品の需要は多々益々增加する一方で、既に設備擴張の必要に迫られ、小倉及び大島に新工場建設中であつたが、最近之れが費用及び運轉資金に充つる目的を以て、四百萬圓の增資を決議し手廣く內外の註文に應ずることゝしたから、今後は一層利益を增加し得るであらう、因みに五年下半期の利益金五十五萬七千餘圓に達したので、その內法定別途積立二十萬圓配當平均準備十五萬圓として一割六分配當を決行した。

◎日本皮革株式會社

東京府南足立郡千住町　決算期三月、九月

◎設　立　明治四十年四月
◎資　本　金　二百五十萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　五萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積　立　金　百五十九萬二千五百圓
◎借　入　金　八十萬圓
◎配　當　率　年一割七分
◎後期繰越金　一萬八千五百圓（九月末）

五年上半期五十六萬九千圓でふ創業以來未曾有の好成績を收めた本社は、其の原因が軍需品の輸出に依る特別の事情である爲め當事者は利益金の分配に意を致し、配當は一割七分に止め、一萬八千餘圓を次期へ繰越した外は全部積立金に計上したのである、されば其の積立金は二百五十萬圓の拂込に對して百五十九萬餘圓

といふ多額となつたのである、而して今期も製造に忙殺されつゝありといへば、これ又相當の好成績を收め得らるゝならん。

◎帝國製麻株式會社

東京市日本橋區裏河岸　決算期六月、十二月

◎設　立　明治四十年七月
◎資　本　金　六百四十萬圓（內拂込五百六十萬圓）
◎株　數　舊株六萬四千株（一株額面五十圓拂込濟）新株六萬四千株（三十七圓五十錢拂込）
◎積　立　金　百二十四萬六千七百圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　六萬八千七百圓（十二月末）

近來各種事業の發展及び勃興の爲に、麻絲並に麻布の需要は急激に增加して、本社は殆ど註文に應じ切れざる盛況を持續し、收益は決算毎に激增して、四年下半期には從來の一割二分配當を一割四分に進め、更に五年上半期に一割六分に進めたが。本社の製造能力は此の以上に收入を增し得ざる爲め先頃資本金を倍額の千二百八十萬圓に增加して製造能力を擴大することに決し、遲くも六年下半期より現在の二倍の機臺を運轉せしむる豫定になつて居る、前途は無論有望視すべきものである。

◎日本製麻株式會社

東京市京橋區銀座二丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　大正三年二月
◎資　本　金　二百萬圓（內拂込百四十萬圓）
◎株　數　四萬株（一株額面五十圓內三十五圓拂込）
◎積　立　金　十五萬三千八百圓
◎配　當　率　年一割七分强
◎後期繰越金　六萬五千三百餘圓（十一月末）

本社は設立後日尙淺けれども、恰も各種事業の活躍及び新事業の勃興期に際會したると經營宜しきを得たる爲に、僅かに開業後第四回目の決算期卽ち五年上半期に年一割二分の配當を爲し、同下半期には更に一割七分强に增した、新設會社としては稀有の良成績であらう。

專務宮內氏の本邦製麻業の前途に對する談話は、斯業の將來を知るに最も必要なりと思はるゝが故に左に掲げて參考に資す

▲初期の不振　本邦の製麻業は明治十九年に其萌芽を發し當時農商務技師たりし吉田健作氏の指導の下に國庫の補助に依り近江に製絲紡織會社を設立したるに創まり次で北海道、下野、大阪等に會社の創設を見たるが初期時代に於ける製品は漸く陸海軍の需要と民間に蚊帳原絲として販路を開拓したるに止まりしより自然各社の業態振はず其極自殺的競爭に陷れり唯此間日淸戰役の際一時盛況を見たるが是れ軍隊向の需要激增せるに止まり其前後は悲慘なる狀態に在りしより大倉男安田翁は之が救濟を畵し不肖其囑を受けて明治三十五年製麻合同販賣所を設け翌三十六年進んで下野、近江、大阪の三社を合同して舊日本製麻會社を爲せり當時世上に製麻事業の何たるやを解するもの尠なく斯界に關する記事の新聞紙上に

掲げられたることなく合同販賣所の組織に際し漸く一記事の時事新報紙上に載せられたるあるのみ以て製麻業の振はざりしを知るに足るべし

▲對立研究の利　合同の當時は製品は各所の倉庫に停滯し原料亞麻亦山積して近く之を消化する望みなかりしが俄然日露戰爭の勃發せるあり數年の久しきに亙りて滯滯せる製品は忽ちにして捌け了り極力生産の增加を計るも尙ほ需要を充す能はざるの活況を呈し茲に初めて會社の基礎を鞏固とするの機會を得たり日露戰後海外より製麻類の輸入尙ほ少なからざりしより舊日本製麻と北海製麻との合併談起り明治四十年本邦唯一の帝國製麻會社となれり然れども其錘數は漸く五萬を出でず之を他の工業の進歩に比すれば甚しき遲緩なるを悲しまざるを得ず英國の百十萬錘、佛國の五十萬錘、露國、白耳義、獨逸等の各四十萬錘を算するに比すれば懸隔の餘りに甚だしきものあり時運の進展に伴ひ新に日本製麻の興れる自ら其所にして兩社の對立に依り斯業の研究愈々進まんとせるは斯業の爲めに悅ぶべし

▲前途の有望　歐洲戰爭は我經濟界に多大の刺戟を與へ製麻業にありてもラミー紡績事業の新設計畫一二に止まらず既設製麻會社にても帝國製麻は倍額の增資を行ひ我日本製麻亦二百萬圓より五百萬圓に增資せり日露戰後の製麻業は常に殷賑を極め內地の需要をすら充す力足らず今や時局の需要激增し完全なる供給容易ならざるに加へて白佛等の製麻地は獨軍の侵略を受け殆んど全滅に歸し恢復易らざるを想へば戰後輸出の豫想は必ずしも絕望ならず積極的畫策の必要あると共に過去に於ける製麻界の悲境生產過剩の苦は當業者たるものゝ忘るべからざる所にして時局一時の現象に眩惑せられて堅實なる方針を破り

徒に增資擴張を急ぐが如きは深く戒めざるべからずと思惟す云々

◎日本活動寫眞株式會社

東京市日本橋區上槇町　決算期一月、七月

◎設立　明治四十五年
◎資本金　二百五十萬圓（內拂込二百萬圓）
◎株數　五萬株（一株額面五十圓內四十圓拂込）
◎積立金　十一萬七千圓
◎借入金　六十七萬九千圓
◎配當率　年壹割壹分
◎後期繰越金　五萬一千五百圓（一月末）

減資決行以來の本社の財產狀態が著るしく着實なるものとなつて來たのは爭ふべからざる事實で、以前二百萬圓以上に達して居たフイルム代が九十五萬圓に減少したのに徵しても瞭かである、而して營業狀態は如何と云ふに五年上半期の收入は前期より相當に增加したれど寫眞の見越輸入が爲せる結果純益に於て一萬七千餘圓の減少となつたが、下半期は一般景氣の良好なる爲め寫眞代十七萬餘圓を差引き前期以上の好成績を擧げたのである。

◎東京瓦斯電氣工業株式會社

東京市本所區中ノ郷業平町　決算期五月、十一月

◎設立　明治四十三年八月
◎資本金　一百萬圓
◎株數　二萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積立金　四萬八千四百圓

◎借入金　二十八萬七千圓
◎配當率　年二割
◎後期繰越金　一萬三千三百餘圓（十一月末）

本社は最初電氣、瓦斯器具附屬品の製作を目的として設立せられしものなれど、事業意の如く進捗せざりし結果琺瑯質鐵管、鐵器の製作を計畫せしが、需要の範圍極めて廣汎なると時局の影響にて輸入品杜絶せるより事業益は順調を辿り、五年上半期の如きは三萬八千九百餘圓の利益金を收め一割二分强の配當を後期へ四千圓を繰越したのである。更に下半期は上半期以上の好成績を收め二割配當に決定し、尙現資本金百萬圓を三百萬圓に增加し四百株の新株中二萬株は舊株一株に對して一株を交付し殘餘の二萬株中三千株は功勞株として引去り一萬七千株を二十五圓プレミアム附にて募集することゝなつて居る、因みに本社は戰後に於て現在の事業以外軍用自動車を製作する計畫もあれば二割の配當は當分繼續し得らるべし。

◎東洋捕鯨株式會社

大阪市西區川口町　決算期一月（年一回）

◎設立　明治四十二年五月二日
◎資本金　三百萬圓（全額拂込濟）
◎株數　六萬株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積立金　二十二萬四千五百圓
◎社債金　五十萬圓
◎配當率　年一割二分
◎後期繰越金　十六萬三千餘圓（一月末）

本社は大正四年五月資本金を七百萬圓より二百三十三萬圓に減じ、更に五年四月紀伊水産、長門捕鯨、大日

本水産、內外水産の四社を買收し、資本金六十七萬圓を增加して、現在の三百萬圓としたのであるが、最近又他社を買收し、捕鯨の傍鯨油精製事業を開始すべき計畫もありとか、因に本季は捕鯨の時機が天候不良の爲め豫期の成績を擧げ得ざりしも前期同樣の配當をなし十六萬圓を次期へ繰越すことに決せりと。

◎大日本製糖株式會社

東京府南葛飾郡砂村東京市日本橋區蠣殼町事務所　決算期四月、十月

◎設立　明治二十九年一月
◎資本金　一千八百萬圓（內拂込千三百七十萬圓）
◎株數　舊株二十四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株十二萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積立金　四百〇四萬九千二百圓
◎社債金　三百七十四萬千圓
◎配當率　年一割五分
◎後期繰越金　八十五萬四千七百餘圓（十月末）

此社は五年六月の總會にて、從來の資本金千二百萬圓に六百萬圓を加へ千八百萬圓と爲すことに決し、九月三十日現在株主の舊株二株に付新株一株宛割當て、十二月一日を以て第一回拂込を徵收したのであるが、此增資は將來に於ける海外發展の準備とも云ふべきもので、差當り第一回拂込金を以て大里に精製糖工場の建設に着手し、主として支那方面に製品を輸出する計畫である。本社五年度の產糖高は六十萬擔と註され、前年度の實收額に比し五萬擔以上の增收である。糖價は六年に入り漸次低落の姿なれど前途は頗る樂觀なるが如く製糖界の將來に就て農商務省當局者の談を聞くに

大正三年八月時局勃發當時は一時外國糖の輸入杜絶し內地糖價を暴騰せしめたるも前年に比し臺灣產糖の增加したると前年に於ける過剩入糖の持越品の堆積したるとに依り內地に於ては格別供給の不足を感ぜず翌四年以後は臺灣產糖著しく增加し四年には三億五千萬斤五年には五億斤を越へ六年には更に六億斤に達すべき見込あり之れ糖價の好調に刺戟せられ甘庶の作付を擴張したると暴風雨の被害なく天候順調なりしに因るものなるが尙右の外內地產額亦一億數千萬斤を下らざるが故に內地消費用として外國糖輸入の必要は著しく減退し大正五年以後は却て其餘剩を海外に輸出せざるべからざるに至れり即ち精糖の輸出は一時爪哇原料糖積取の困難支那に於ける日貨排斥等の事情の爲め稍々減退したるも最近に於ては是等の障害も恢復し尙遠く英領印度濠洲等にも輸出を見るに至れるを以て近く一層の發展を示すに至るべし要するに本邦は最近一兩年間に從來の砂糖輸入國の位置より一躍して輸出國の域に達せるものにして本邦糖業の將來は極めて多望なり云々

◎鹽水港製糖拓殖株式會社

臺灣鹽水港廳太子宮堡新營庄六五
出張所 東京市日本橋區吳服町一〇
決算期 六月（每年一回）

◎設　立　明治四十年三月二日
◎資　本　金　千百二十五萬圓（內拂込七百八十七萬五千圓）
◎株　數　二十二萬五千株（一株額面五十圓內三十五圓拂込）
◎積　立　金　二百五萬三千六百圓
◎社　債　金　二百五十萬圓
◎配　當　率　年一割七分強
◎後期繰越金　二十九萬五千三百圓（六月末）

本社の五年度の產糖高は八十萬擔と豫想されて居る、之れを前年度の實收額六十五萬八千擔に比すれば實に十四萬二千擔の激增であるが、今假りに一俵當り五圓の利益としても四百萬圓に達し、前年度の利益金三百九萬圓よりは約百萬圓の增加となる、然かも本社には此の外に耕地白糖の利益もあれば、實際の利益總額は更に增加するものと見らるゝのである、因みに本社の鑛業分離問題は、目下立消えの姿なれども、五年度の定時總會頃までには、一種の計畫を發表することゝ察せられる。

◎臺灣製糖株式會社

臺灣臺南廳大竹里打狗
出張所 東京市日本橋區本石町
決算期 大正六年ヨリ三月、九月

◎設　立　明治三十三年
◎資　本　金　二千九百八十萬圓（內拂込二千八十三萬五千圓）
◎株　數　舊株二十七萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二十五萬四千株（二十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　五百五十六萬八千百圓
◎配　當　率　年一割六分
◎後期繰越金　八十二萬八百圓（六月末）

本社は五年九月一日を以て臺北製糖を合併し、二千七百五十萬圓の資本金を現在の二千九百八十萬圓に增加したのである、此の合併の方法は臺北製糖の四十八圓拂込株六萬株に對し、本社は二十二圓五十錢拂込の株券四萬六千株を交付したのであつた。本社五年度の產糖高は百四十萬擔と豫想されて居るが、前年度の實收額百十四萬五千擔に比すれば、二十五萬五千擔の激增である、これは本社在來の植付け甲數が增加した上に

臺北製糖の分が加はつた爲めである。尙ほ本社の決算は從來六月一回であつたが、六年度より三月九月の二回にした。

◎東洋製糖株式會社

臺灣嘉義廳南靖庄
出張所東京市麴町區有樂町　決算期　六月（年一回）

◎設　立　明治四十年二月
◎資　本　金　千二百三十萬圓（內拂込金八百二十六萬五千圓）
◎株　數　舊株十萬株（一株額面五十圓內四十二圓五十錢拂込）新株十四萬六千株（二十七圓七十錢拂込）
◎積　立　金　二百四十萬三千圓
◎社　債　金　二百五十萬圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　五十一萬千三百圓（六月末）

本社の資本金は、五年七月三十一日を以て沖繩の玉置商會並に臺灣赤糖會社を合併した爲に現在の千二百三十萬圓となつたのである。五年度の臺灣產糖高は百二萬八千擔に達すべき豫想であるが勿論此の內には舊赤糖の分も含まれて居れど、前年度の實收額四十五萬五千擔に比すれば、實に二倍以上の激增である、シカモ此の外に舊玉置商會の沖繩蔗園からも五萬擔內外を得られると云ふことである。

◎新高製糖株式會社

臺灣臺中廳彰化中蔡庄
事務所東京市芝區琴平町　決算期六月（年一回）

◎設　立　明治四十二年十月
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込三百五十萬圓）

◎株　數　十萬株（一株額面五十圓內三十五圓拂込）
◎積　立　金　百六十萬圓
◎配　當　率　年一割七分
◎後期繰越金　十三萬六千九百圓（六月末）

本社五年度の產糖豫想高は四十六萬九千擔と發表されて居る、之れを前年度の實收額四十萬擔に比すれば、六萬九千擔の增加であるが、今此一擔當り利益を五圓と假定しても、其總額二百三十四萬五千圓に上り、前年度の利益金百八十九萬六千圓よりは、四十四萬九千圓の增收を齎らすのである。

◎帝國製糖株式會社

臺灣臺中廳臺中街
出張所東京市京橋區銀座四丁目　決算期大正六年ヨリ三月、九月

◎設　立　明治四十三年十月三十日
◎資　本　金　七百五十萬圓（內拂込四百五十萬圓）
◎株　數　十五萬株（一株額面五十圓內三十圓拂込）
◎積　立　金　百二十六萬三千圓
◎配　當　率　年一割八分
◎後期繰越金　二十四萬千四百圓（六月末）

本社は五年七月三十一日南日本製糖會社を合併し、資本金二百五十萬圓を增加して現在の七百五十萬圓としたのである。五年度の產糖高は南日本製糖合併の爲めに著しく增加して約五十二萬擔以上に達すべき見込である。

◎明治製糖株式會社

臺灣臺南廳麻豆庄
事務所東京市麴町區有樂町　決算期三月、九月

◎設　立　明治三十九年十二月
◎資　本　金　千二百萬圓（內拂込八百九十二萬五千圓）
◎株　數　舊株十五萬八千株（一株額面五十圓拂込濟）新株八萬二千株（十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　二百六十萬圓
◎配　當　率　年一割七分
◎後期繰越金　三十八萬千七百圓（九月末）

市場に於ける本社の株式は殆んど準公債を以て遇せられつゝある。之れが理由は營業狀態の健實と財產狀態の確實、又た配當率の確定せる等に依るは勿論である、而して五年度の收獲は八十萬俵以上にして此れが利益は昨今五百六十萬圓と臆想せられて居るが、若し此の利益金を全部配當するに於ては五割以上を決行し得るのであるが、併し斯かる大利益の大部分は社內に保留されて配當率は一二分を增加するに止むるだらう、尙ほ本社は臺灣に支那向きの製菓工場を作る計畫がある、因みに五年九月決算の利益金は百四十萬千七百餘圓に上り、之れに前期繰越金二十一萬八千六百圓を加へたる百六十二萬四百餘圓の內、法定準備九萬圓、配當準備積立三十萬圓、次期繰越三十八萬餘圓を社內に保留した。

◎沖臺拓殖製糖株式會社

沖繩縣島尻郡豐見城村
事務所大阪市南區鑄町三丁目　決算期六月（年一回）

◎設　立　明治四十三年十月八日
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込二百二十五萬圓）
◎株　數　舊株四萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株六萬株（二十圓拂込）
◎積　立　金　二十五萬圓
◎配　當　率　年一割二分
◎後期繰越金　五萬八千九百萬圓（六月末）

本社は四年十一月資本金二百萬圓を增して現在の五百萬圓としたのである。而して其增資新株を殘らず八圓のプレミアム付で募集して、一擧に數拾萬圓を收めて以來本社の名は一般の知る所となつたのである。▲五年度の產糖高は沖繩丈けで分蜜糖約十二萬擔と臆想されて居る此の外臺灣の赤糖、樟腦及腦油も相當の額に達するさうで、收入は前年より著しく增加すると云ふことである、尙本社は遠からず二百五十噸宛四個の製糖工場を建設することに內定して居るのみならず、蔗園の增加その他種々の新計畫を立て、盛んに事業を擴張せんとしつゝあるが、近く日本氷糖會社五十萬圓を合併し氷糖業をも擴張すると云へば今後必ずや刮目すべき業績を擧げることゝ察せられる。

◎臺南製糖株式會社

臺灣臺南廳礁吧哖庄
東京市日本橋區本町一丁目　決算期六月（年一回）

◎設　立　大正元年十一月
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込百九十七萬圓）（十二圓五十錢拂込）
◎株　數　七萬二千株（一株額面五十圓二十二圓五十錢拂込）新株二萬八千株
◎積　立　金　六萬六千二百圓
◎配　當　率　年一割
◎後期繰越金　三萬四千四百圓（六月末）

本社は五年三月臺灣の安泰糖廠を合併する爲に、資本金六十萬圓を增加し、二十二圓五十錢拂込の株式一萬二千株を發行したのである。大正五年度の產糖高は前年度の倍額に達すべき見込であるが、今糖價は假りに前年同樣としても利益は前年の十九萬九千圓の倍額卽ち三十九萬八千圓以上に達する譯であるから、配當も無論進める餘地があると云はればならぬ。

◎日本製粉株式會社

東京市深川區東扇橋町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十九年十月
◎資　本　金　百五十五萬圓（全額拂込額）
◎株　數　三萬千株（一株額面五十圓拂込濟）
◎積　立　金　六十一萬五千圓
◎配　當　率　年一割六分
◎後期繰越金　十五萬六千九百圓（十一月末）

本社の利益金は四年下半期の十三萬千圓が五年上半期には十九萬五千圓に激增し、爲に配當も一割二分より一割四分に進められたのであるが、五年下半期は製粉の海外輸出が急激に增加したるとと、又一には原料の買入が低廉なりしとにより、又復た利益金は增加して未曾有の多額に達したのである、去れど本社當局者は利益金の大部分を原料の價格切下げに充當することゝし、此の期は增配を避ける方針であつたが、何分增配熱流行の折とて終に二分增しの一割六分に決定した、因みに本社は遂に決定したる兵庫の斯工場建設費其他の事業擴張費に充つる爲め近く資本金を三百增圓に增す筈である。

◎日清製粉株式會社

東京市日本橋區末廣河岸一六　決算期五月、十一月

◎設　立　明治四十年三月
◎資　本　金　百七十萬圓（內拂込百三十七萬二千圓）
◎株　數　舊株千二百株（一株額面五十圓拂込濟）新株三萬二千八百株（四十圓拂込）
◎積　立　金　四十五萬五百圓
◎配　當　率　年一割五分
◎後期繰越金　七萬九千百圓（十一月末）

本社が五年の下半期に用ゆる原料の買付けは最も割安なる時代に於て決行したる爲め、假令粉價にして如何なる安値を現はすにもせよ相當の純益を擧げ得る豫定であつたのが、其後の粉價は昂上一方と云ふ有樣であつた爲め豫期以上の好成績を收め得たのである、之れが爲め配當は三分增の一割五分を決行し、更らに事業擴張の目的を以て百七十萬圓の資本金を四百萬圓と爲すことに內定した、而して此の新資金は現に工事中の水戸工場の外に新たに大工場を建設する費用に充當する豫定だと云ふことである。

◎電氣化學工業株式會社

東京市日本橋區本革屋町　決算期五月、十一月

◎設　立　大正三年
◎資　本　金　五百萬圓（內拂込二百九十三萬餘圓）
◎株　數　十萬株（一株額面五十圓內三十圓拂

込九萬餘株二十圓拂込六千餘株）

◎積　立　金　七萬八千圓

◎配　當　率　年一割七分

◎後期繰越金　三萬三千九百餘圓（十一月末）

新進會社として順調を辿り來れる本社は五年度上半期に於て二十七萬餘圓の利益を擧げ內十萬圓を興業費の償却に充て一割二分の普通配當と三分强の特別配當を爲したのであるが、下半期は更に好成績を現はして三十三萬餘圓の利益を擧げ十萬圓を興業費償却と爲し、一割二分の普通配當と五分の特別配當を決行し得る事になつたのである、要するに本社の將來は益々發展の餘地を有するなれども、茲に一の懸念すべき一事は日本窯業との係爭事件なるが萬一當社が敗訴したりとて基礎に影響を及ぼすが如き事はあらざるべく、而かも何等か穏和の方法を以て解決さるべきとも思はる。

◎日本ペイント製造株式會社

東京府荏原郡品川町南品川宿

決算期四月、十月

◎設　立　明治三十一年一月

◎資　本　金　百五十萬圓（全額拂込濟）

◎株　數　舊株一萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二萬株（一株五十圓拂込濟）

◎積　立　金　五十七萬圓

◎配　當　率　年二割

◎後期繰越金　五萬九千圓（十月末）

事業擴張の必要に迫まられて株金全額拂込濟となつた本社は五年十一月以降六年上半期迄には製造能力を大いに增加する筈である、而してペイント界は依然として好況を維持しつゝあるに鑑みれば五年下半期は上

半期以上の成績を豫想し得られる、尙ほ本社は當分不增資の方針だと云ふから今後の利益金の大部分は積立金として社內に保留され財產狀態は愈々强固を加ふることゝ察しられる。

◎品川白煉瓦株式會社

東京府北品川三〇一

決算期三月、九月

◎設　立　明治三十六年六月

◎資　本　金　二百萬圓（內拂込百四十萬圓）

◎株　數　舊株二萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二萬株（二十圓拂込）

◎積　立　金　三十二萬五千圓

◎配　當　率　年二割

◎後期繰越金　十萬九千九百圓（九月末）

我國建築術の進步と共に煉瓦の需要は逐日增加の傾向を生じつゝある、而して煉瓦事業として本邦唯一の本社は時局の勃發に依り社運頓みに發展し、殊に昨今に及んでは各種工業の興起に伴ひ耐火煉瓦を始め化粧煉瓦の註文益々增加する一方にして現在の契約高は今後尙ほ一期間の全製產能力全部を發揮せざれば履行し難き程の額に達して居る、而して五年上半期の利益金は百十九萬七千九百餘圓で二割配當を決行せる外十萬九千餘圓を次期に繰越したのである、尙本社は最近日本窯業會社を買收する事に決定し現資本金を二百十三萬二千圓株數四萬二千六百四十株とするのである。

◎日本セメント株式會社

東京市神田區西今川町　決算期三月、九月

◎設　立　明治二十一年三月
◎資　本　金　百十萬圓（全額拂込）
◎株　數　四萬四千株（一株額面二十五圓拂込濟）
◎積　立　金　七萬六百圓
◎社　債　金　六萬圓
◎配　當　率　年一割四分
◎後期繰越金　二萬六千九百圓（九月末）

本社は五年度上半期の營業成績は輸入セメントの杜絶とコンクリート需要の增加に依り七十二萬三千餘圓即ち前期よりは二十萬圓以上の利益金を收めたる結果一割四分の配當を決行したのである、下半期も前期同樣の盛況を齎らすに於ては價格の騰貴に依つて更に一層の好成績を收め得る次第であるが、我がセメント界は南洋印度方面へも販路を擴張し得る見込あれば輸出セメントの數量も或る程度迄進展すべく、本社も愈々增資を決定したれば製造能力も今後益々增額するならん。

◎淺野セメント株式會社

東京市深川區清住町一　決算期六月、十二月

◎設　立　大正二年
◎資　本　金　七百十八萬圓（內拂込五百六十八萬圓）
◎株　數　舊株十萬株（一株額面五十圓拂込濟第一新株四萬株（十二圓五十錢拂込）第二新株三千六百株、五十圓拂込濟）
◎積　立　金　十六萬六千餘圓

◎社　債　金　百七十萬五千圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　九萬五千四百餘圓（十二月末）

本社は五年下半期の初めに於て安値時代の契約品供給の爲めにセメント市價の騰貴も營業成績には餘り好影響をも受けざる狀態に在りしが、爾來全能力を發揮して安値契約品の供給に努め、一方高値の新契約を爲し、昨今は新契約の供給のみならず隨時市場へも供給し得る迄に到つたとの事である、因みに本社の鶴見新工場の竣成する場合には能力は現在の二倍以上に達するさうである。併し茲に一考を要すべきは既設會社の擴張新設會社の計畫等遂には供給過多に陷りはせぬかの懸念である。

◎愛知セメント株式會社

名古屋市南區熱田東町一八四　決算期三月、九月

◎設　立　明治二十三年五月
◎資　本　金　百二十萬圓（內拂込九十二萬圓）
◎株　數　舊株二千四百株（一株額面五十圓拂込濟）第一新株七千六百株（同上）第二新株一萬四千株（三十圓拂込）
◎積　立　金　十二萬三千圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　七千圓（九月末）

本社は五年九月迄に於てセメント界の好景氣に依つて十三萬八千餘圓の大利益を收め、其の前期は僅々八分の配當に過ぎざりしもの、一躍二割の好配當を爲し其の外固定資本の銷却に三萬圓、積立金に七千圓次期へ

七千圓を繰越したのである、尙ほ六年度上半期の營業成績はセメント界の動搖程度に依つて如何なる結果を齎らすべきや不明であるが若し今日の市價を保つに於ては三十萬以上の利益を計上し得る豫想である。

◎大日本人造肥料株式會社

東京市日本橋區北新堀町　決算期六月、十二月

◎設　立　明治二十年二月
◎資　本　金　千二百五十萬圓（內拂込八百四十三萬七千五百圓）
◎株　數　舊株十二萬五千株（一株額面五十圓拂込濟）新株十二萬五千株（十七圓五十錢拂込）
◎積　立　金　百二十二萬二千餘圓
◎社　債　金　百九十萬圓
◎配　當　率　年一割四分
◎後期繰越金　五萬一千九百圓（十二月末）

本社が五年上半期に五十二萬七千餘圓てふ新記錄の利益金を收め得て一割の配當を決行せる所以は肥料以外硫酸の價格暴騰して此の期の製品は勿論前期よりの持越品迄賣行きたる結果である、而して下半期は七月以降九月迄の最盛需要期に於ける肥料の賣行は當時農家の購買力恢復せざりし爲め前年に比し約一割の減退を來したが、其價格に於て前期より著しく高値に賣却し得たるが上、更に硫酸其他の副生品が露國南洋等に引續き輸出せられ豫想外の收益を得たるを以て總益金に於ては前期より增加を來し九十二萬二千餘圓の新記錄を得るに至つた。

◎日本窒素肥料株式會社

大阪市西區土佐堀三丁目　決算期六月、十二月

◎設　立　明治三十九年一月
◎資　本　金　一千萬圓（內拂込五百五十萬圓）
◎株　數　舊株八萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株十二萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　三十萬五千餘圓
◎社　債　金　百萬圓
◎配　當　率　年二割
◎後期繰越金　七萬七千五百圓（十二月末）

本社の製造するカーバイト、石灰窒素、硫酸安母尼亞酸素セメント等は輸入品の杜絕せる以來天井知らずの騰貴を演じ來れる爲め利益金は急激に增加し、五年上半期は資本金に對して五割六分に當る百九萬七千餘圓を計上し一割五分の配當と、財產償却、法別兩積立金を控除して七萬餘圓を次期へ繰越したのである、尙ほ下半期は硫酸安母尼亞の暴騰に依り前期以上の好成績を收めたるを以て多額の積立をなし前期より五分增しの二割を配當した。

◎日本化學工業株式會社

東京府南葛飾郡龜戸町　決算期五月、十一月
出張所東京市京橋區鎗屋町

◎設　立　明治四十二年六月
◎資　本　金　三百萬圓（內拂込百五十七萬五千圓）
◎株　數　舊株一萬三千株（一株額面五十圓拂込濟）第一新株二萬七千株（二十五圓拂込）第二新株（十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　百八十九萬圓
◎配　當　率　年二割五分
◎後期繰越金　四萬二千三百餘圓（十一月末）

本社は五年上半期に拂込資本金百五十七萬五千圓に對して百十二萬六千九百餘圓てふ大利益を收め、內十三萬圓を家屋器械減價償却に充て、八十萬五千圓を法定別途積立とし、尙年三割五分の配當をしたのであつたが、下半期は主要製品たる鹽酸加里の低落の爲に、一時は餘程利益金の減少すべき形勢となつたけれども、幸ひに市價恢復して左程上半期に遜らざる好成績を收めたのである。今後とても製品の市價次第で利益金に多少の增減はあらうけれども二割位の配當は將來とても出來ると云ふことである。

◎久原鑛業株式會社

大阪市北區中ノ島二丁目　決算期五月、十一月　但配當ハ一月、七月交付ス

◎設　立　大正元年
◎資　本　金　三千萬圓（內拂込二千萬圓）
◎株　數　舊株二十萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株四十萬株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　千二百三十三萬二千八百圓
◎配　當　率　年三割五分
◎後期繰越金　四百十六萬千九百圓（十一月末）

本社は五年三月資本金二千萬圓を增し現在の三千萬圓と爲すに當り、增資新株四十萬株の內十萬株を七十圓以上のプレミアム付にて募集し、最低八十二圓のものを募入とし、其差金を擧げて積立金に繰入れたことは今尙ほ人の記憶する所である。本社の事業は金銀銅の鑛山經營、製錬事業並に電氣および諸機械の製造、石油業等であつて五年上半期には五百三萬九千圓の利益を收め、年三割の配當を決行したが、下半期は上半期よりも百萬圓以上の利益增加によつて三割五分配當を決行し、八十餘萬圓を積立て多額を次期へ繰越した今

後の成績は事業の發展と共に益々良好を加ふべきことは云ふまでもなけれど、製品の大部分を占むる銅價の高低如何に由ては時に多少の變動を免れまい。

◎寶田石油株式會社

新潟縣長岡市城內町　出張所東京市麴町區有樂町　決算期三月、九月

◎設　立　明治二十六年三月
◎資　本　金　二千萬圓（內拂込千六百二十五萬圓）
◎株　數　舊株三十萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株十萬株（十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　二百十萬圓
◎配　當　率　年一割五分
◎後期繰越金　三十萬四千圓（九月末）

本社の資本金は五年三月まで千五百萬圓であつたが、之れより先き五百萬圓の增資を決議し四月一日現在株主に舊株三株に付新株一株宛割當て、現在の二千萬圓四十萬株としたのである。其營業狀況は時局の影響にて日を逐ふて良好に赴き、五年上半期の如きは二百三十七萬七千餘圓てふ空前の大利益を收め、財產減價銷却に六十萬圓、法定別途積立に二十五萬圓を充當し、配當を一分增しの一割五分とした上に、尙約十萬圓を後期繰越としたのであるが、下半期は再三油價引上げを發表したのみならず、賣行きも上半期以上にあれば、又復た多大の利益增加を示すこと丶思はれる、因に昨春以來新鑿の油田は何れも頗る有望なりと。

◎日本石油株式會社

東京市麹町區有樂町　決算期六月、十二月

◎設　立　明治二十一年四月
◎資　本　金　二千萬圓（內拂込千六百五十萬圓）
◎株　數　舊株　萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株二十萬株（三十二圓五十錢拂込）
◎積　立　金　二百十九萬一千餘圓
◎配　當　率　年三割
◎後期繰越金　百三十六萬九百餘圓（十二月末）

本社は五年上半期に於て、二百九十七萬餘圓てふ未だ嘗て見ざる多額の利益を收めたが、配當は依然年二割として、五十萬圓の償却を行ひ、別に百二十萬圓を後期繰越としたのである、然るに下半期は燈油及び輕油よりも、本社の產油の大部分を占むる重油の需要が著しく增加し殊に上半期に於て持越品の價格を極度に切下げた爲に、利益金は前期に比し約五十萬圓も增加した、目下の鑿井は其數八十坑なれども事業擴張の漸く熟せるを以て更らに新規十數ヶ所試掘着手の計畫を立てつゝあれば、次期は於ては一層の好望を期待し得べし。

◎株式會社横濱取引所

横濱市南仲通り三丁目　決算期五月、十一月

◎設　立　明治二十七年五月
◎資　本　金　百八十萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　七萬二千株（一株額面二十五圓拂込濟）

◎積　立　金　三萬二千七百圓
◎配　當　率　年壹割
一般經濟界の景氣恢復は勢ひ取引の出來高を激增せしめ、五年下半期は生絲五百九十六萬六千斤、米百五十一萬八千六百石、株式十七萬八千二百七十株てふ空前の大取引を遂行せしめたるのみならず收入は價格の騰貴せる爲め大いに增加したるより配當は一割を決行し得る迄に立ち到つたのである、而して六年度上半期は如何と云ふに前期の好成績は期末二ヶ月間の廢賬に依りたるものにして、爾後期末同樣の成績を期待しつゝありしも、米獨國交斷絕により一時意外の打擊を受けたりしが前途に悲觀すべきものなく、殊に市場繁榮策として砂糖其他の商品取引開始に就き調査中であるから或は意外の好成績を擧ぐるかも知れぬ。

◎後期繰越金　三百四十七圓（十一月末）

◎株式會社東京米穀商品取引所

東京市日本橋區蠣殼町　決算期五月、十一月

◎設　立　明治九年一月
◎資　本　金　三百萬圓（內拂込二百二十五萬圓）
◎株　數　舊株三萬株（一株額面五十圓拂込濟）新株三萬株（二十五圓拂込）
◎積　立　金　二十三萬四千三百圓
◎配　當　率　年二割二分
◎後期繰越金　一萬八千百圓（十一月末）

大正三四年引續き沈靜せる米價は、五年度に入りて漸く回復步調を呈し、爲めに本取引所の出來高は日一日多きを加へ、五年上半期の如きは實に三千百餘萬石に上り、更に下半期は作柄悲觀、在米激減の擊と共に米

價は頓に强硬となり、米價の强硬は又復た出來高を激增せしめて、其總石數五千百八十六萬四千五百石に上り、本取引所開始以來嘗て見ざる盛況を示し此結果株主配當を上半期の一割六分に比し六分增しの二割二分としたるが、四圖の事情より察する時は米界は今後更に一段の好景氣を演出するものゝ如く、殊に近く綿絲其他の商品取引を開發すると云へば本所の收入も尙大いに增加すべき餘地あるものと云ひ得る。

◎株式會社 大阪株式取引所

大阪市東區北濱二丁目一　決算期 五月、十一月

◎設　立　明治十一年六月
◎資　本　金　七百萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　十四萬株（一株額面五十圓拂込濟）

◎積　立　金　六十七萬六千八百圓
◎配　當　率　年三割
◎後期繰越金　一萬四百圓（十一月末）

軍需品の製造、其他の製造工業の活躍により、關西地方は五年春頃より全國に比類なき好景氣を呈し、恰も景氣高潮の源泉は關西にあるかの如き思ひあらしめたるが、此結果として株式界の人氣は寧ろ東京以上に旺盛を極め、本取引所下半期の利益金は上半期に比し約倍額の百二十萬餘圓に達し、明治三十九年下半期の四割二分配當に次ぐ最多額の三割配當を決行した、今後のことは今茲に豫言するに困難なれど、媾和の爲めの一時的恐怖と、悲觀と警戒とが全然地を拂ふて去るものと云ひ得べくんば、多々益々樂觀するの外ないと云ふことに歸着する。殊に增資問題も主務省の方針決定せるを以て現在の七百萬圓を倍額の千四百萬圓に增資し發展策を計ると云へば前途面白き運命を有するものならん。

◎株式會社 東京株式取引所

東京市日本橋區兜町四　決算期 五月、十一月

◎設　立　明治十一年五月
◎資　本　金　千二百萬圓（全額拂込濟）
◎株　數　二十四萬株（一株額面五十圓拂込濟）

◎積　立　金　百萬五千圓
◎配　當　率　年三割
◎後期繰越金　一萬千九百圓（十一月末）

當取引所の市況は五年上下兩期に亙つて、創業以來未だ嘗て前例を見ざるほどの殷賑を極めたれば種々改善を計り市場を二分し、更に三分して賣買取引の進捗を促したるにも拘らず尙且つ後場休會を餘儀なくされたこともあつた去れば其收入も亦創立以來前例を見ざる多額に上り上半期には九十三萬七千餘圓、下半期には百四十四萬千餘圓を算し、上半期には前年下半期に比し三分六厘增しの二割八厘、下半期には更に上半期に比し九分二厘增しの三割配當を決行したのである。今後尙ほ此趨勢を持續して、更に收入を增し配當を增し得るや否やは固より確言出來ざれども、當局者は四圖の事情より打算して層一層殷賑を見ることあるを確信し、着々之れに應ずる準備を進めつゝありと云へば將來頗る有望なるべし、殊に增資問題も愈々決定して千二百萬圓を二千萬圓に增し同時に仲買の身元保證金も增額して信用の强固を計ると云へば其成績も大に嘱目すべきものあらん

附錄終

大正六年三月三十日印刷
大正六年四月七日發行

實價金五拾錢

編著者　白眼老叟

發行兼印刷者　東京市神田區錦町三丁目三番地　小林文

印刷所　東京市麴町區有樂町二丁目一番地　報文社

發行所　東京市神田區錦町三丁目三番地　東文堂（振替東京七七二三番）

賣捌　全國各書肆

不許複製

終